倭辭書類從

鶏鶩物語

上下

望月機本倭書文庫
利12
2.166
ハ1

利門
鶴
2.166
卷

續羣書類從 九百八十五上下

鵜鷺物語 上

明治四十一年四月二十四日
藤野漸氏寄贈

活字板ノ本ニ校ス　但活本ハ一三三ノ巻ト二冊ト
後ロニ巻メリ　今見ル所ノ本ハ三巻ヲアリテ巻メナシ
天保九年二月十七　忠亮

第三　一　七夕因位ノ事　真玄假粧文向ノ文使打擲事
第三　一　山鳥太郎述懐ノ事　面々評定ノ事　鳥羽王事
第四条ノ巻ノ末ニ　四　一　山鳥太郎意見ノ事　思白毀讃状ノ事　両方廻文事
第五条ノ巻ノ末ニ　五　一　両方礼ス官位姓名着到事
　　二　住吉願書　後見鳥悪日發向教訓　城要害事
第九条ノ巻ノ末ニ　七　一　正素師行ノ事　着甲冑次第　八陣事

和歌管絃文曲の事

望月樹斎倍実文庫

鴉鷺記上

藤野潔氏遺愛之記

宮城縣図書館

そもそも烏鳥林にくらべ忘すかりし長舌なり鷺鷥河よ
ある法師身にいたりて法師云ふ乃相かし世間者
仏
位乃ある法師高牧乃性命 底生ゆ来ん性也眼 よ
見そそ乃色をわらすに耳ゆそのことをあさまくそある
附の憎愛乃思るとそぎくか此て拘らす綾京乃係北
いる附ハ器乃おを記してを並て位せを拘以乃ゆ似ら
来ことて留すを去ことを一切ゆ乃ハ法乃
幻
ゆ一茂幼泡教のをを天地開闢人民初め

生まれてよりおのれ二皇の帝たむけ一天の仁徳し
四海の義を則る王侯の度をたしなみ孝行の号
自然とふるまいて国家をあまねく治めて
まことに乃やわらぎて礼をもって修める仲尼
花鳥王道を興し黄石子房武器をもって四書五経ハ
と紀を続六韜三略ハ歌を詠ずるは嘆ずるなり
是ハ則文をもっておさめ武をもって
治を伝ず故ず世を治め民を利するハ文武をもって経緯
とす和漢乃勇士古今世武将これ文あって武なくいつ迄
も武あって文なき文を尊ばず武を尊ぶもの二翼乃ごとし
てかかること世変事多くして文武ともに
ますれば武事振ふ小人君子をあざむく愚人智者を猜
ふ乃ごとし梟雄を宗とし恩あり恥食を厭
はいまして合戦闘諍をもってよとせんわる鳥獣え
年九月上旬の頃の合戦作りをわ豎鰐をつわる
移碕の礮撃ちをくはる抵図村の島あり
東方佑奥をもって中けるれ扶すあれ男子生
まる号生心すると和ろくいろろんかの

能藝をかゝるこんまちくらをむすびそうやと思ふる中
鴨の正月に能事あり。山城寺の寺主とそいひくる能を賞し
たゆやさおめこ文武二道達者なり春秋は眼をたゝしてハ
武勇はらうをあらし閑詩に心をそめてハ花月乃
やさしくうるを嘆むかの公主息女あり婉娩なるかゝハ
梁花乃春はなをあびくるあひくるり幼稚なるをあひ
早桜か雪乃うちにはあるをとるを心操年柳に寿を
元おとなびて能藝あるまゝひハゝをもおくるやうなり
年まもなくはゝそくくるゝ陸情人なまちき　又

管絃呂律かゝるを世をあるにしはあるあとハ又
くるひなくまるひくく艶なる乃ゝとけるさを書物乃系は
東洋ゝくるそかゝはるひ紫式部ゝ源氏をくし
筆乃かゝるをかくやんとをくるゝ和歌かゝる歌をて
ハ一人かゝるを年をとをば古歌をくるをハ花
なくゝをくるをすくをくるかゝるゝ姫乃ゝをくるゝ小町
うをををくゝくるゝやをくるゝをくるゝ又
月をくるゝ月乃かゝるをけくゝせるをくく又
ハくくくるゝひをる絃句戈を乃めをとあま絃をくをくる

てを一人くさにひとくさなる雪ちらんと花雪とけるあるは
かたひめの紅葉とまらぬ和歌はすよめはとも大ら
心ちらりなるいはさ乃世ちとりまりいちるいさ花
やまとんとめ花とぬくくてよちんて和ちと
りへさちる和乃代ハ雲ちるる和乃代ハ雲ちるる
いけるをかいはさる雪をよ海ちんすへて出乃和海乃
ちそ詠ちれる歌一和歌をよちる花乃雪
侍一かさくていひかちるあをひなくさくんか
岡一かくはさハ宿乃雪砂乃彩ちはくする雪一ちよ
へるハかくはさ原ちする雪とりへ雲花部ニ月書
乃世ちちくひ雪ちる恨恨かちはさくをち
けるちくちくちる時分花海ちるひえはちんちる
花花花ちくけ時花嵐乃ちをたくちくを
移ちをはちをつる思ちはくるたちとちを移り
富士乃煙ちをちをせてハ雪ちとちを移り
侍ちんをはけてハ作書とくくはいはくちをてあくを
歌乃和歌侍ちあくはちりへ心花てけく深ちを

いましめんとや 独りて吉野山乃春乃こすゑには花を雲
かとまかひ 龍田川乃秋乃なかれには もみちをはしきかとうたかふ
かふ 花をなかむるとても 花に月にむかへは 心月にうつり 村雨
て 花を何とて散らん 月を何乃思ふらん 邪念忘想を
はらく乃うちにあらは 佛菩薩乃教へ至極へおもむくは是よ
よって 神明佛陀も納受し 給ふや 八幡大菩薩は神乃
本をもからもとすてたるとよりし 八良家北宮
相々官階をすゝめ 位を大明神は 夜やさむき 衣やうすきと
詠しけれは ゆゑあひ乃雲に神慮をおとろかし給ひ

三十六人は歌仙人 廣家持遍照素性業平小野小町躬恒
貫之をはしめて 皆是佛陀乃化現也 されは人丸は慈
野くの歌をよみては 和国乃言葉をとなへ 一首に六義をそなふ
なす是をもて和歌乃本とす 仲あるも心にくらはすなるといひ
歌に權者をいはゝ 在原業平 小野小町なるへし 業平は
是をうつしはしめとなりて ちかひ乃ほとにたよりをありすか乃中
将は極楽世界の歌舞乃菩薩 まさに観音乃化身ともいふ
まは説きくひ乃ほとをまもりて以ん去給ひは 給ひては念を
むさあるに似たり 志れは三千七百餘之人にちかひて むとふ

とを行ふ法といひ、あるいは世の人のくら
きをゆるしたまふことといひ、わるきものの所為なと
しるく皆仏果をいのるしるしなんと也。信者は行者の大悲か
権跡（ゴンセキ）と思ひいてゝ、これを勧め、いく世廻りなんとなうち
五条乃あたりやまてハ中地の風光と、わるきを沢用やあるわと
なけく化縁かきりあるゝ。元禄（ゲンロク）四年五月十八日戊時より
五十余年てきるむりひて、行ひ、ひとゝ小世小所
ハ大日乃変化なり、わるくはちなるもの、いくたくさん
人の心をなを仏〳〵といへとも、行とゝ、へぬるハ都ちをひ

都ちさはよひはてハ関ちの乃ほとりを、ものをむすひ、ひく世人の
わるきをいのるを、これ、なを、ものを智證大師法
ちんの仏〳〵ちをて七日七夜法ありて、先ちを
分れ、ありさまをたゝくまいりて、時ちをひくるを
つゝふめて年ハなのやけをとをひちんもまをあるを
ものをとるそ乃ちを元食と命りくむり、ちの乃ものを行いまいを
いれつゝ、乃ものをり、骸（カラ）と命りく、独ひをを、行ひをけ
てをあるめくと、詠を是則（ナリ）、賢者必業乃ちをを世乃人
ちを、ものを、接乃ちをひとををのよくはちんををつをを

ゑを行そうとせんまさに成れるひ[illegible]四病
八病六義長欲短育旋頭ゑ混本折句沓冠畳句連句隠
題誹諧無心厚著廻文ゑ水脈れかつてなくてあり又ゑ
言連歌しゑ言わ五しくゑ七ゑ七とゑ[illegible]きめゑ[illegible]
疎句ゑつづく親句ゑ鈎とかくゑ[illegible]ゑ三人箱九章れ密
傳十二人ゑ化身自性論の灌頂阿古根ゑ浦ゑ傳位れ
忘草人麻れゑ星れ宮ゑ伝の祕事ゑ羽破深義古今ゑ一
字ゑ祕密因十二の德義仁和の中ゑ二義人九の三服の
墓小野小町が時代不同ゑとゑかゑれなるひ事いくゑ五れ

るかゑるなるゑよるそかゑりゑる琵琶ハ盲蓋武ゑれ八代
大納言経信ゑれ四代法アれの尼が貞子位ゑ位ゑ指僧侶がゑ
かゑをうけゑるハ白玉天の高ゑをゑつ稲ゑ厚陽れの和ゑ中
極ゑと性雅ゑ位ゑ拙ゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ違れれゑ屋の床の
ゑ人ゑれゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑれハ人ゑ。新白象なとゑ琵琶ハ朝
家ゑ宝物ゑ双ゑ名器なゑれ宮ゑ[illegible]ゑあれかりて
ゑ[illegible]ゑ琴ハ延喜れ聖ゑれ代ゑ岩殺の倍奉賢
四ゑれ五代白幕ゑれ三代の貞子安藤ゑ盲れ流也佛位世
乃大緊那羅ゑ[illegible]ゑ陽陰の琴迦葉尊者乃紬と

白氏文集に、絃ひし曲、始皇帝の荊軻が害をまぬがれ給し
花陽夫人乃つまをとをかくしたんと是をうそぶき給ふ
ハうとそうけ給ふ事まつ寿鶯囀。伽陵頻。崑河多これ
壹越調乃呂れ曲なり鶯囀。平調放鷹。左食調新乃
桜。右鳥桜。角調右の大曲也常乃大曲まあ次。拍子ハいく
わうひあり盤涉調の律の曲ハ鳥向乃鶏鳴乃ホなりけり
といふ事ハ五音を四季四方呂律
に見てハ宮ハ壹越調土音君なり。商ハ平調金音臣
なり。角ハ双調木音民なり。徵ハ黄鐘調火音事
なり。羽ハ盤涉調水音物なり。又音を四季四方呂律
ハ春東呂。黄鐘調五南律。平調秋西律。盤涉
調ハ冬北律。壹越調ハ中央呂也。七音ハ五音と五徵五羽と
なり。又徵ハ上乃調なり。五羽ハ下乃調なり。五
羽上乃調ハ林鐘調と下乃調を
角調といふなり。六調なり。五調なり。大食調品とかなる也
七調ハ北なり大食調と平調とあり。せくつ上下北乃調と

くらんこと二とすなはち調をなすなり十二調をのすなはち十二列し心を八音
ならべ金石絲竹匏土革木なり人金ハ鐘石ハ磬絲ハ絃竹ハ
管匏ハ笙土ハ塤革ハ鼓木ハ柷なり呂律七律ハ雄風の
鳴なりその音高くなり呂ハ雌風のなりその音清
短一又その力のあるひとしきなり琴記にいはく樂ハ
系なり君子ハ多能にしてその能をえらびかんしてその
欲を防ぐなり故に則系てうるを安欲を防ぐ
能をかねそなはるとなり又系ハ金石の聲
管絃の音をいふなり陰陽乃和順をえなり又云
系漢書君ハ系をなすく人を能にして体一矢安法の君ハ系を
なすく身をたのむ人を能にして体一なるなり風俗通に曰
能にしてむるハ人一なり能にしてなるを管絃記にいはく大
笙笙を作りて通風のなるを高管を作つて逆鱗のなるを
笙ハ任也高ハ信也笙を吹く風を停らしむるなり笙とは
管を吹てをのく鱗を信ずるなり高管とはいふなり樂書要
録といふものをはらんりん横笛ハ無系金物といひ人なり
たゞ中にいきをあるなり又郢曲ハ女子
をひけるとなり　ものをあるなりて神系俗系韓神

内俗名とうひろる中ゆ元俗ろるゆの石河。鈴鹿河白馬河口
鷹山田中、牛戸。苧力蝦長澤ゆ也。律ゆうる也。苑名升鷹子
鶏鳴雞沙沸狭鱈川呂、雲也又凡俗の大名などれそしるき
すとてそうひけるとうん

○四月二七名国信一真言倭絃文使杉擢年

世乃よろ門の絃を弟部とゆるるんうる見ゆ世ゆいら
なる飛りと俗してみゆ形せうんなるのうるを能知るゆ
うひなうんとて俗るのふとも知めうわまゆ八なるり元
なるうゆてえんをのうむとうんなるゆ八分限とうひるい

名字とえうひ久見ゆいうるる聖幸帳乃隆子麿紅国北裏
傳道うるうるゆ出るうるとてゆ鴨川のみうる波中鴨北るゆ
猶ゆうる也高云俗うんうるうるも多しるるるるもゆ
如多とるて思るうる俗波見の鳥みゆのようとるゆる
久るあるゆやするゆるるゆたるるひうるひうる見さを絵ゆき
るあ波ゆうる移繁ゆ由狭波るゆるるゆ也とゆゆゆ黒白
うるるる中狭ゆ俗るうるゆゆ先祖ゆるるを今ゆてゆる
一条一ゆるるて史記の文を知ゆうゆく瓊史姫ゆる
文を遊子とうひ婦を伯陽とゆる借光をうるる子八二八ゆ

候陽ハ三四の旬也と此文にいふハ遊子十六伯陽ハ十二より
夫婦となりてたがひに心ざし切なりしかバ月をあいしける
かぎりなし夕べハ月の出るをまちかね暁ハ月の
入るをおしみて高峯の峰に伯陽九十九にして死しけり遊子
ひとりのこりて月をのみ見る程に伯陽鵲によせ
室をとひゆきけれハ遊子もともになげきて百にて死しけり
天星となりて烏になりて天をかけりて銀漢にかへりて
河をわたりてわかれける此事帝釈毎日此門にてかよひ
給ふ事なりけれバあつまりてわたるをゆるさせ給ひけり

とりわけ七月七日にハ帝釈善法堂へ法集の日にてかよひ
たまはずして此門をわたることをゆるさせ給ひてあそびいへ
人間のためにハ一日一夜なり此時烏と鵲と羽をならべて橋と
して彦星織女をとをす也是を鵲の橋といふ漢を渡す
いふ烏鵲の橋にハ紅羽を並二星に尾敷にして風冷々
より是ハ紅葉にハあらね共紅葉をいふ事つまく羽の字を
えらびよむ也七夕のあかねわたしにならべて鵲の羽をならべて
くれなゐなるといふ事なりとこそかたりけるちるに身の程も
なくうたがひもなくいひてやらでむこになるらんと申しけれバ山城守ハ

中く思るよりとるるまをいひる高さてハわきとるる
こさんなるをその後なるハ杉よりもくくくひとりく孤をあ
るるかはるを不釋なるをるるるるるるるるるるるる
思為をおく荒言をるんなるるるるるるるるるるる
乃乃るかやけとて見れをいりるる取る高さかれ姫の紫
はるるるる冠の糸をるるるるるるるるるるるるる
てんを乃杉くをはるるるかるるるるるるるるるる
孤りくさい迷乃はるるれるるるるるるるるるる
をはるくいりるけるるるかるるるるるるるるる

はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
はる料人かたるるるるるるるるるるるるるる
るるるて墨閣の硯をなるるるるるるるるるる
るるるかるるるるるるるるるるるるるるるる
文をるるるかの姫るるれるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
見るる紙園柿るるはるるるるるるるるるる
るはるるるるるるるるるるるるるるるるる
けるる見るるをはるるる伊加古の海れいるる姫ハるるるるるる

丹と男へ云ふ高〻なる山の鳥羽をのうるに云ふ
屋の位を月表鳥羽のうるに
鳥羽殿と乃宮ちい宮ちよ宮中と陸よ宮
いのちを乃泪深なれるくきたれるんの宮たとりく
くきを乗れと乃ありとうちちを世をくくきたよ
宮紙ちうきゆへ乃ちれつたくもちくて乃
くかの柏木北漢いのちに二品の宮乃ちる男ひ乱
一位かよりあちき宮乃りとなけなんを今
又明ほ乃ちれほ形んとまてのきくて

高砂くくちの高い川のまちとハかりてくきの世
らんとなりめ代てあき海一形ちを長ぎ七生海とゆん
とて要銀の硯をむらひく白扇の紙をとりて

よりやたちちつれ泪川くきの川むとをいのちとあく
宮やとのうてをのちをけいくを男をとりくきをを世
ちをにむけくちの形ちをりけりくてやもんをを
ちを形ちをの後をもむけくきを泪川くちりあ舟をを姫の
ちを男の海心をくくを成くに海乃かたんあくのき生
けるをちとりるゆきちひくくれやちをまいくをとて

とりあへず御すてきこゆ けるかちん社をこして後せうそこまいらす
思ひなやみて 偲ぶをしりて此事をかく
鳥羽の上におきし給ひさ乃かひもなくは わきまへかたき物と君が代を
かへし給ひのすゑをしりけるにはむかし 紫平奈良の京のみかど
かの乃さと 淡海よしとへる かりにねぶりける 御かずにすへて猶きし
を母 兄弟のいまだ ゆきし かはしけるによりて しかれども かへしぬ
かへしけれ かすかをとりて
春日社乃若紫のすりぎぬしのぶのみだれかぎりしられず
あと かきて 折ふしをもて 終ひの又 哥乃心は 斜遠天皇 社

御宮に高麗乃表を烏乃羽にかきて 折ふしかりをよむ人なり
しをはかりことの羽をむして 練貫にうつしてみえぬかきける
心をまよひたり。何かしの人 志ある思ひの色をあらはさんと覚
えけり なる時は 梅乃枝にやさしき 殊人をたまひて心をしるす
つまぎの 風にうちそよぎと かへりけるよし あるときは 菜花 に
露乃玉つきをむすびて 思ふをいとと 秋乃色にかさねとしるみ
とるおとづれ ひくなかしとも みちにはちかて居すもあり
また山城国は 去にし年のくらふよしを しりて 此君の尾籠緩怠
をたすも なお 家にとて おはしまして 腹立して 家内の

あるときねるまあぶし 紙帽子して 罷科をんとそいうりける
高玄又千寿まかくとゐ爾ゐ寿ゐるのるあゐ浮みのうちひすを
度のさまつめしてゐるちれるのちるとるねるゐ爾ゐしうるとらめて
いまつめんとおほをさくめて耳くよ鼻よとてうれめよ
あひゐへし ゐ寿きくとるもきくゆまし とてかうらをゐるく
久ゐ奴高玄ハむこゐかゐ擯じ川ゐ寿にハたゐるされつ
高くさ心ゐあしさそるもかくあゐ牛よ 鄭とあ世たるあゐ
る 勝くうんくとして待りきれとも世るきなくひまても
ゐし 山城寿も一旦こそ 脇高とあと又みかきて中間の

寿るゐるせて山城度ゐりとるゆきてゐ寿とうるよてひ
そうるゐるうまへしといひるくめくるうらしける侍ち中
略まけてゐ寿こそくとるよけるあるらしも ゐ寿
川べるあきりてあるうもるゐるる侍きハるて 高麗 変ゐて
いまてゐるこれるこうるめうけるを山城るみあひて
されくそ山ゐるきくし 半よと思ひてそのれハ何ゐそ
なのみくばくるせゐそれとゐてゐれハ美濃 とるとび
かるてくけるんづゐくるゐ程 打 擲くるを
山城寿侍みいるくるとそれ主がるまたるうかるれ変るく

かくちいさくてけうがのいきさきをもむけられを
知用とまりやすて論説を狂ひ人はどそなでからずして
放埒を現し振舞の拙き食物かきくもさ行をみるも人
名ーかすせ佳れふしてよあけハるとうねて形を
うかち放逸を懲の玉極行のうとれよちん臺塔をかく
やてい散来を見るひ市町をめるとて八菓子を荒して来て
とふれ名詮自性の愚賊なりさらり北かとくをたるを
きくこ思なるを内さハとて見下ようこそ思ハさすら
山城ちとふ程乃それ孫ちちんとや詰白種を北荒

言をたるおなる推系列一乃奴なりといひあくせくそ退
放ーるる

○列三山鳥太郎述懐　面々評定　鳥羽玉車

さる程ようけりける使ちく祇園林よ降りてうかりける
次第を須と芸かるる芸大きよいりて生涯乃瑠璃い
てきるる。わさをうを秋と思ひんかとぐいけとらふこそ
ちちさ名ハりて中野ようけるちんとうこいて
来ちを後見ちりける鳥神ようすりて文金北玉極さこそれ
入ひるちん北芸科をあやまる程ていよをそ北かまへちき

子ハいかに申とも恥しく思ひてたんぐれ強弓せたるふ
さまをハ恥のうへの恥とぞ成へしまづ見て笑ひまづ
浦日乃ゆゑよりたのもしくといへハけるをとりあるる
一門乃鳥こか林よりねらひをさしもるを聞こゝろよ
あひまちうくいろせるうるくといひあひける一門乃山鳥右衛
ハ黒革ぢ服巻乃いかものをきさきのちゝ・ニかいちゝ
かゝれたるし兜態ぢ大らぎよせくいぐく斗なるを
矢二三百ばかりくちたるべの男よ打揃かけ
長篠をせくきりけく来陸ちりる極信卿一

て原なれくゝをきをかりかきを父山鳥乃ちゝ
をとりくゝ流乃腹をなくゝ右衛ちゝ和の猪長なる
名字ハ元仰を不断在京ちる先年猪を魚類ぢ合戦か
附ゝ長ぬかの乃ち郎ハ年ゝ人よ体ぐらすゝちわかゝる
ハくゝ打やか附ちハ紅羽ちゝ代外也絵石武勇とハ重代
ちゝ右ハ太鳥ぢいたゝ和多言ハくゝ左孔綾急をゝと
をゝ仰ゝ見てわゝんるゝきいくいんとゝあゝを和ち
山鳥太郎ら計會ぢをゝを見て下をげ乃ちゝや元早ぢ
愚やとめをひをくゝ和を記をゝて強弓名んくぢ詳定ゝ

山鳥取れは意見はゆかしくは来とそ有りけりはやらんといふ
太郎山鳥乃ほとりにてみられけるハ常にまつひなき共是ハ
はるゝ事なれハ形と思ふなとらるとも其あまりにまたハ
あらへかねてさんは山乃の方なきハ浮ぬはやくそゆくなる
冊そゆらんさましハなきにとてハ春といへハ岩乃戸開く
神音ちそなく折られけむ花梅の香ひとも匂ふらし然
雲と乃と世にあやまの花盛りとも庭乃こすゑにほめ哉
てなれハ山部云ともさまよしさにきて秋ハ日くらしのゆふ
かけなる猪とも けなるき物と思ふし紅ハなくてはなるまじき

はけ見る人もなくて散ぬらむ山の方に花冊とも れど
乃ゝなるを冬にありけさるゝ人のあまりはしはるゝ山桜と
此雲の夕若の持りける四時常住の京乃余韻え近くへさる
事ハ此一字乃ことは自然と興をかもしまさり兮事に
かはるものていふつきましなき哉やまの浮ほどはしそ
優なるはなそしてゆかしけなりて奈は
さる耳をもおとろかしはりや又果を見なくてはかゝれ
武帝此詩ハ余のまたなかりてはしま不肖なるもよらぬすと
かけらむかはゆやてハきの仁にあるなる分限もなかりけるも

弓矢の道ハいさゝかおろそかにもせざりけるか此ころの輩までもよろしく
さむらひとさへ筆とるにまでみゆる子細もなく此世ハ勇士の家々
のやうにみなありしてかゝる子孫ハ文藝も心なくてかなふ事少からず
孫まてもなきすら祖父似我とおもやかる事此世ハ武くて下司のたくひ
にても蛇乃道ハ蛇とおもひ世上へ心をよせとて武道にこゝろへ候
此家の知ハ芸人けなきことさまなる絶やはへ性のみち
よろしかしおもふとも武勇忠不思後ハ諸道にかゝりておのつ
からまちかとけなるともまた分きくがやうに文字暁たる中にも
よしなきとみえくはかやうなる世のとて中ゆるや八幡も此段は
へ無理にまされるぞこゝね菊富貴迷懐の事なるかやうに富貴
貧家ハいにしへも遍去乃ならはし代業なきハ大聚経の十来と
見えても高性ハ礼節よりある下賤ハ驕慢よりある貧福
ハ慳貪よりおこるとはあひさたむ先世乃宿縁とて
はかりくはへたしもなきをもて分限を志らざる事にあらね
ある所をやめりてハ世にありて物をもさとる卑劣にてあり
はかなふ人の物をとりへハわかすなきさるをもすゝんでとくへ貧
外にむかふくハ志おほてとふさむみると恥ぶ恥ありとなき貴
方ハ末世お恩のかつらとしそ見てもら此人嗚呼姦佞朝に

あるい賢ハ野まうけ世間ハ時代なると日本為ほうくといふまて
たくさんなかきる さるい国ハいくさ場ハ著が大なる
なる和ら敬金後區ほうく一定なる事なりやあるもうまを勢
ゆうてとうとせて天罰少ほうもなるもなんといふなるふ
をまけく当国ハ勢をそなわるくうなりまうせんといふ
又ちうこうなるさ意見まい当世武士をさ紀とする時分也
報意ほうせうる合戦理をなりたるまうるや作らん
上意をへてうちたい部方大金もあるい家ハ一国ほ煙
ちうそうさせくやむつなうるといふまうなわいらくさいひ

ほ屋ほ也屋羽玉のようなもちんといひ作りける而ほ屋なる鳥の
いちくよりとうさるハ柳国ほ鳥羽玉といふハ作るなる
らんと鳥羽玉とうるい素ハ牧宝ハ北宝なる渡角玉鉾
鳥羽玉也渡角といふハ屋北角なるなりて海門をわるほ
ゑ方ニ丈ハりけく也玉鉾ハ牧宝乃外威北先祖鉾宝なる
宝をなるほ渡鉾ハ素特ハさ紀をわるまむけ玉鉾ハ作と
いふつけくさ角く法ありてやすわわ鳥羽玉ハ異国なる
五尺ハ鳥とひきるるふりの羽のあひとるうるを玉なる
これりさ宝なる異くしく世間うく御ほうる牧宝の

好軍を退忠（クンチウ）といふ事あり。く大きなる鳥をつくりてかの中に種々の食物を入れ（いろ〳〵）鳥あれをくらんとて鳥の中にいる時ふくろをいろ〳〵なる百の繼松（クイマツ）を入れくらす。鳥をうばいとり〳〵ふくろをあけてかの玉をうばひとる。鳥をハ〻〻〻（るあり）世あきしかまんをといふ世ハ陸奥国蓑ノ武士（ブワリ）といくさをなしまろんとをしけれ玉をいてすなたちまちまろくなりてかろきけれる。黒きつゝまるゝとハ（けのるこれうり）うはものとりもとといふハ先ん〻く喰（ハキ）をたゝきて（い）黒石をうゝる。常ハ好みてさけられ物ゝ〻〻〻決定かの評定をいふなり。雑説（サウ）ハ伝ふるそいくさのうはものハ物ハ不吉やとそいひあひける。

○京四山鳥太郎意見黒白毀讃（キサン）状　西方廻文集

ある山鳥太郎吳見（まり）ともたゝかをきいてをしあひて いくこたりきやうたの中ともあるを（グイ）を托（たく）ものよ 中を取ハとも一つひろ（イチモン）知を（チイン）ハ一大なるとおもせ られんをうれうれ〻〻〻中（ハ）きを国乃るハ国もうつ 所（奥）ぶ南国とかあすとも莫大（バクダイ）れせひ〻〻〻田会 北大なるハ生田森（イクタノモリ）の鳥（ウロモノセウ）ノ武（ブ）ノ鳥ハ武（ブ）ノ手ハ（バツル）も拔（バツル）ハ〻〻〻

他にても八紘 山鳥 鷺 鶏 梟 木兎 夜鷹 日雀なとハ手を
うくさる与力その外国のかくハいつくも出へし かくと定まる
其ハ数百をあつめ次第を集すへし あたかも陣の中鴨
の杜をハ二重三重とも囲く 諸北一門をん 結かへ杜乃
あくはく皆服をきらすへし 次ニ夜うちなとのすハ志此
体し法ハ太りな利ありなん 志知りをすともよくあ
ひつきたちわかけ知らせと 心得てたちまちハ伍方ハ損し 出すし
其川かつけを防く見を称へしとも ハこの時 異見すへき国
しけるやう屋く日く其ハ 此鳥つとひゆきて不と思ひ

陣のまくいりく中鴨ニ居やる森杜ニちをかけ城ニとりく
藩垣ゆひく矢倉あけ火ちうちニ篝たちそく用心りの事
密らさを構えて往ニ各国かかすさすニ何もさくろみなる
あはへ去 枝うら北すハ思ふよう従て 心ハさくまてなりなん とて
とりなる 志るす去よう下縁なりける 鷺あり すまぬ
穏便なりしを其ハいらぬを 無為なるやうにまた思ひく 山城ちす
いくさ世を見給ニ兵革久しく無うて千戈をうこうかさず
夷狄跡を消して弓矢をしまひ 府分ておりてわきまへしから矢
ときまり 攻戦 防戦 きりきちかかふなとの さきわし 下

をもいくせつを後世乃古墨乃一面をもくみてて
自他安穏なるやうるはたくひひへくといひくさい山城乃椽
堪たるを拾くいく穏乃此鳥乃尾毛念の毛拾を
なしいひのるおるくよりたるるをこのみたるはるをこのみ弓
矢ハ拾乃面のさいたいなるはるはまいるもおりけといふへき
と脇立くくさハおるとかるまハとはるもかくあもやすくむつと
打くせさせてハ付乃茅をなくまけまれ茅をなくまけんと
図書をてはらくくるはるの人乃後を拾くおりをさ
なくくは心意を拾さ面ヤ世くまて此硯瓶一向はるまひの
緩急よりおくらはるとくへ玄理性を立合くくを拾の
とがいさくくとくくくさ黒白いろをるくくるとくへ玄をるさはるあひく
るくくてるさくくるを作をくくるくさはるはるはるへく巻怠
乃發向有へくくはいとかくてをくくるくる紙図拾玉中鴨
くくをすくへくをくいふ雑説乃打くくを此文を見くさ
てハ耳こくくの後孫系すへき科ごさか拾とくるくさハくるる
世くいまくくをくをくせ別て中鴨子拾をはくくる
一昨日打擲踏鋼の狼公稽を係くすてを發面をくくて
後るる北一畳なくびを同意与力の類を保警をくんと

[illegible]ものとして[illegible]所[illegible]代也大法堅固の時より和[illegible]
弓矢を[illegible]を[illegible]
く思[illegible]なり[illegible]
[illegible]
慢じ[illegible]
々[illegible]
せ[illegible]
法を[illegible]
[illegible]

[illegible]
桃橋花[illegible]月落烏啼霜滿天[illegible]
長黒子[illegible]
大[illegible]
を蓄刀筆を貴く[illegible]
使を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

芝又させる無名なるあるを以て仏子殺すべ魚をとり女をせて
爲帽子をいろ〳〵分て仮宜の殺せすんくらにすべ殺云
雀を畢る仮〳〵子をうむ附ハ哀憐〳〵命をうばつる形
冥界ハ仮てハ技因をとよびと邪見乃獄をあひ石生地無
業といすむとゆへ云本地地獄薩埵〳〵大悲願提の
業をなすす悪念怒ハ車輪乃如〳〵二ツすてゐる一ツ
分屠を物利乃雲をうけ〳〵淫交を阿鼻の焔を献す石生
界無悪なるハ法を成仏の教を〳〵弘誓を窮るして
利生他をとゝ紅蓮大紅蓮の河多ハ水をかゝ

〳〵ゆり焦熱大焦熱乃夕無ハ炎をとゝ不のなを鳥る社仏を居
て秋宜祢を乃をを蹈敬を仰き矢性災厄ハ怪を去愉
盗乃無名を〳〵悪賊を畢〳〵むとゆへ去賊を鳥を
〳〵〳〵猪を子ハ白波をもいひつる〳〵豊自非他雑言ゆく去
〳〵〳〵次取捨当家歌すの思ひを紀ゆかへ〳〵先世仏物の
他を為をせん弓ををつ〳〵男を妙〳〵すをを社仏の館を
糸を〳〵虫へなゆ〳〵をんバ不男を殺命して一戦の骸を
さん〳〵俳句

八月廿五日

山城書屋

とはすれば、こたへかりそめに云人候まゐりてなほ問てつ
とりかへ
かりそめに中略まゐらん祝うけく遂本望き用害かゝる歌を
待うけける氣色也使者あるべ　はちくさ　もてく高麗　は
墨色いと行ゐるとそ　紙　園林ゐるとそ　狀をはくくやも
曲やかるとそいとき出ゐるく文を矢とり見山城ゐ大勢の中
ゐて初ゐて見ゐる文章矢はくにくちゐる理屈ゐるゐる
狀者ゐ筆ゐをゐあきく一圓よどゐとれゐふはゐるゐる
ゐて使者を呼出ゐあをかくゐもれゐと見ゐるゐ矢ゐ

黙ゐく一筆を認ゐて乃狀ゐいきく
ゐ和歌札を投ゐゐ則　狀究の不文章矢　考にくく志
強あきゐくゐす蓋ゐ推量乃をゐ返答をゐ杯
はを殺のゐ大法ゐ怪く義矢を墨ぞとゐく和ゐ尚矢ゐ
ゐて書くゐんを思矢をゐゐゐやすゐゐ行ゐゐく骸を賀
義門のゐゐ和ゐ矢ゐ知ゐく一名を中略北のゐすゐ矢ゐ行ゐ
んゐ勇士乃和矢ゐゐゐゐ眼ゐの恥辱を補んゐ為ゐ
宣徳使乃羽をかゐん傍ゐの嘲哭をのゐんゐて綺を
云人候ゐゐ。ゐとゐりゐ仕ゐ長ゐ。名ゐゐ安雅意

の合戦・給乃とぶ鳥からぬかねては又神鵺子募種々北自
徐を吐ぞとて鳥なき里の蝙蝠に似たり黒色をかくるし
様々の新言をたて門ならぬ磨粉木に風折々よとならん
鳥の名鵜作共異をかむ。鵯黄雀の言葉いはれまじきら
すといひて自称の更一子桃鶴桃酒をいてすといふ去月の光り
も霜乃白毛白色にはしるや万葉の十六にいはく

波羅門之作多留田乎喫烏瞼腫天幢仁居

古今六

「からすとふおほをそ鳥のまさてにも来まさぬ君をころくとぞなく

鳥を大をそ鳥とは東詞也わろきことをおそといふなるべし
なるとせ也ころくといふは来るといふ也きこゆるぶんはさして烏をあさけり
といひ見えしてわれつつ侍ることハ

六帖には

蒼茫霧雨霽初寒汀鷺立なとといふ

「多渡さる宇治の川ぎりたちもこちてをちかたをしれ日ぞなき

「高橋やゆききたびの跡すらも絶えてかはとかはへに

此詠歌は又宇治の字の山の名所にはなへておぼゆ紀す
きかれてる綺のすからも尋ねるをも寄り宇治橋の
なかしとみてまちのさき紫つつ舟の名にもゆきちらぬる
事とあり是ハ身にも宮人の言あれば語はいふは也和語

乃至さいはい氏をもつくるす作なる白馬天竜人な
江口の白女黒岩の花も白川のうち也花ハ去る雲といひ雪と
乃ふいひくたるも金粉も白色なり鳥有先生塵劫を蓄
とうく雪山童子本偈を唱て本石を割く長偈といふ句。是
一聯なり。又鳥獣の情反哺の候を知といふハ白花の畫敬の
誠を申と是こか一連也何ぞ此上北一句かく侍なり孝
り重北る父母の血氣をうきてうくるを孝養の
心なくんハ志りとなを鳥の孝養ハきしをとるもねあるあり
傍題なくもハ細をあるハすんさちや慈母らさり日の
鳥の加らも白色也真女の義をなるとなを去月をはまく風
秋なる花なと無端振涼きくまよりなくうくるくるくる
二文まくるといふ一句ハ作なる振
詩の篇を見ずや殷代なる白色を貴ぶ又花嚴法花の
芬陀利華ハ白色の蓮花なるゆへ也是よりなく天台ハ
白色を尼色のなとすと尺し作なり仏法僧を指と昔
般若の説処白鷺池ハ白蓮なるゆへ経を打びくくり白
馬也仏ハ白衣観音神ハ白山權現。神乃仏乃内典外
典白を貴る例あるくくよりハ大悲開悟の切

ゐたる人民位位位方の物言思ふハ和光同塵の利生
蔭よりいて功ゐよりもまさる神宮寵殿の霊験殊勝
の儀勿論とゐ長別して一社の位ちとゐるをきらす社壇
ゐ為ゑ位してそこなる社恩を謝感ゐ わ生らる一切水
口基申延喜の聖代ゐ勅ゐ賜ふかゐく朝恩尚ゐ位の允
ゐ位ゐ世ゐゐくをかゐ位ゐ基ゐ位ゐ信ゐ位ハ価値のゐ
ゐ絶ゐゐ基をかゐ社ゐゐ位ゐ名字をゐけゐて生ゐる物
ゐゐ夷狄治罰乃時二神の霊験言いた生ゐく矢ゐ生ゐ
ゐ鋒ゐ花ハ此神也かゐく社ゐをき社ゐ細ゐゐゐゐゐゐ
附ハゐ檜ゐ法ゐゐゐゐゐ無かゐ願ゐ振ゐゐ一石絵不
日ゐわゐゐあひゐく自他ゐゐ無ゐあゐゐんゐ生ゐ見ゐゐく
不雄の為警死生ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ矢
ゐ凡系ゐゐゐかゐる物ゐゐ和ゐゐく生言ゐよゐ
異ゐ抜系ゐくハだてんとゐ紙面かゐゐあり志願ゐ
法ゐすゐゐゐゐ為ゐ云

八月廿五日

正吉

御返報

とゐ社ゐくゐゐゐゐゐ状ゐ紙園林ゐ法ゐゐゐ

去去知らざる事なれば遠しとする所也 久老ハ名ん く
まつらに思ひたるまゝにそらひあひらさる程の中 鶴ハ急き
方々へ廻文をもて北條氏 祇園林寺東帝結とりまの所ハ
隆をかゝりうるおを忍ぶを事とし 仁義を敷り放埒を先とし
他をわひるをもとゝ門とゝ思るゝ 独老い先日尾張
ゆゝ細ゝく飛脚をあつまる所 ゆゝその憤を教ぞんがたゆる
一家他門の兵革をかゝひ出る所 ゆゝ登向をへとゝかの
去去ハ一門をらくして多力多勢なり ゆゝ技倍なる
まんハ金々変ゆ折角をあざむ ゆゝ多北方々に去来
法はまつるをもつて法例事よりく
假をまくび季をいた次来三日ハ
ゆゝ別仮の住恩を存きへき相也 鶴林寺 鶴山ハ
もおそれいる 警客警辭の業ハ志はく風聞の交を
絶て鶴羽墨乃陣を防ぎ 武一味の仕合力あつらへ
きおなる忘劇纏以て東西を思ひ 所詮也不具備云
八月廿五日
津守四素
祇園林寺廻文あるての物まいく 去去大事をえる
則去也山城守四素ゆゝ天をうつる所なり去りて

正成とハ武略の達者なりけるを能くして勇士乃所中なる人に
なき故に依りて此恥を雪んと志る事あらし思ひ明らめ侍りし
欲して日ならず葛籠ハ鉾をもち人々松にかゝりつく事大
まのあたり云 但し是よりぞ三んハ兵無なんぞ松にあがる事を許さん
然共ハ荒島哀憐乃補弼を以て勝ことを一時のあひだに決
し憤を仲秋乃風に散ぜん不備謹言

八月廿六日　東市佑林胡呂志云

狩野会毀拗復目録巻二 方々へ遣る 自弥右方友位世名まん刊弁

さる程に正成が使廻文を以て方々へ遣ゆく先一門にハ高橋
男木森勢江の湖水の汀にある所の諸勢おもむく所

京しても上洛有べしとなく當國にてハ鴨門白門ハ中に
及ハ次大井門桂門竹田門鳥羽冩森又宇治の并さ紀の
然んし木津門并洗太子門ハ諸勢の知りのやうなるハ
よと門の有るに応じて宜しく身方の勢乃わかりおるなど
乃高須楪野。えや。江口。森口吹田など海ても流されけ難波が
との然んハ都とりも上洛有べく次。生田杜の鳥京に尉が
多勢にてをとのかんするをなせむるひろく待つべしとふる
森。林ハ狩阿倍益荒の地も安濃有べし右寄に川ハ松原ハ
正成が一円不喩の領知なるべし先さまく松原。あるの松原

こひの松原毘野松原　乃松原は比松原とつ比松原嵐の松原
おほえは雲まいろさら原也それの国々ま松原多しといへた
まけ職肉を國を廻文を国々乃それかるは八まけ和歌比浦波を
んせさせては何へかゝつといはまし　鶴の紀伊弓鵝鵡ち
菱飡大炊助居舎ノ大納言鴨子とりては中かも黒鴨田鴨鈴
鴨鮮鴨なり紫鷺白鷺赤以あをまい黒多又鴨さ紀まる
鴨まそ何ては何こそ田鴨海しき羽まうらしぎ山志ぎは心かゝる
して鳥乃うゑなりまぬりたくべ味村かいつかり千鳥鶺鴒門
せりば稲負鳥右乃元鶏雲雀鵰奴鷺胡雀杜日といふ燕

大山法ある石燕その名もうち紀都多まてんはかくはゆ弓矢の
うち地はいさ志らも當のお仍及とかや。いきる。連雀尾長鳥。鵯
ねらよし　こ四十柄。虫食。松むし。目白。せんまう。菊戴さびい
執情の初とも八にちまかひるまさ人ゝ也雀の一族ゝまとくそ河原
まとめ川せんめ。ねうなさい雀。ふぶ雀。わつまかせい斗也。大伴の嘆
子鳥。猿ア志あるえうゝへも廻文すよあと鳥はたらうちえねる也
志ら極山中まる細あると見ゆ。然て江まさあはちかほ
悦哉中ても入ちわまらは會歎名まれ多なりそし欲方と四足
の物ゝ法ぐとうけるりはいそう強毛へし、と云。志るゝ鳥を

いかにハはるねをわきしくハ同名呉祢の初とてよふことと同篇
のことす也萬る思ふしまハ吾下に都遠しきく以外の計會也
ま云ゟ清々ひも我てそ引遠國ハ遥ゟる京甚あ然當國ゟ
かくしハ附とろつさんへしぬ正素ハそこかとすしときわなき八
一定上手うちあん社を日に清いく上洛有へし森の下ハ大
ゑ鳥の色退の地北面るに人も思ひわ然も夜都杜はやとる事
またおてハ皆々合力有へしと申付く生田の鳥来つゝかゝる人別
しで帰せ清ゟハ是ハ一方の家猪ゝる申也まい門當國にわね
てハ岩神ノ杜。岩瀬ノ杜。毎杜衣手ノ杜。磐田ノ杜。行器ノ杜常盤ノ杜

鴾 夕本 鴇

久我杜羽束師ノ杜。来背ノ杜萩ノ杜柞ノ杜志然るハ名寄に出る所北
杜也鳥ノ同心よしくを先鳴大和ち。鷄漏尉将士雉左衛門
山鳥山鴫鴇出羽ノ法橋定覚梟木工允。木兎。夜鳥鷭。日鳥
夜鷺。ちうり。柏鳥。うしなるかあけてくれしき箱鳥やと然ら
呼らん筒鳥乃あきけふときは特牛鳥。鵜。鵐。田鶏百舌鵤
鵃しあん。列象鶉。むく鳥。番匠鳥。志め北判官感國。鴇ひとり
てハ赤鶏てい北がしらえてなすて。こなての勢をさ紀として津山
遥ハ谷森林に名とも志る役も径。又附合ありてわる鳥まて
打まてそよせとて主云ゟかゝん領状をしるに鳥来がいろく秘ゟゟ

ヲハめりそめるも白畫ヲうらうられへ爲希代不思議とうつけ
うらやうらあつまりてわめきさけびてわらふるゆゑうつ
云容像として他をいかしむへきまにかくも笑なる拙ハその徳
世ヲすて家ヲうる老子ハ長生ヲ孔子ハ首ヲかるるを縊子
ハ心のうらうとなるを仙ヲ笑れ乃ちうつとくハへりこをうハ
聖人の生存ちう理ヲもなるとやうなるを愚分の国ヲと
のすさ侍さ誠ヲ眼の光人ヲ射る拙ヲ木拳北斗やうなを
瓜多乃似る不ヲ生なるうこさ侍ハさるるなを紙鷂肝
要なり点せげなを度渥分乃紙ヲ異ヲ明るの面とうりてハ
糊ヲ塗りけと呼。老若ヲ死ヲ背るをかこ点ヲとゞ鼠ヲ
ヲ猫ヲうく。多ヲとるヲ夜ヲ仰ヲ又年齢国ヲ老ハ
通力ヲうて人ヲ蕩ヲ天麓のうち れハ神通自在ヲて
拔張ヲ物ヲ見るヲ阿那律乃天眼ヲもて苟ヲ昂座ヲ
物性ヲ現るヲハ賓頭盧北奇特とも編へし。そ北うこと思ヲ
ヲ昌黎潮州ヲ赴し時、藍関の雪ヲ負て病ヲ蹄ヲ靴ヲ
費し泣く秦山領ヲ頌し扶ヲ韓湘忽ヲ来くいたく
去年、てるのうを降て着く雲横秦山領家何在雪擁
藍関馬不前といひくとうるなうこうむをひく東西ヲうるを

そもそも此家風を大乗学ひ或ハ忽然として
秋をうるふ時ハ炎を雲を降し身を焼て咎し猛火を吐
深谷の間に居して聊人倫をまじハらず年月
をへる仏ぞ雇云自然の徒まことに山林に住棲
丹心遊ひ三思九思の一言まことりて妄なるを恭も仏法
ハ初祖大師の流を敵て教外別伝の名を出す多類の
法をもき如とうくとい人を惑して欲をもて百丈の野狐の
云問ハ是をきくを本ユ允が鼻垂玄沙逆罪のあとを
無間の罪をうるく解脱をえ眠廬頂上を踏て牧牛をけら
ん実際理地をハ一塵をもうけを。向上托一路ハ仏眼も伺ふ
一仏見。法見をもあき妄見をる。ふをき正見をもちん問来
ん三教一如をうく昇脚の志をりんを。ををたつとく俗
すへきハ仏教也。玄佑二諦内外去典をのをく森ぢをわをう
をい鳥の能をて伝ふいかほをを男ハ同心を益
なを芸弓矢の業理をを芸ハちをう為をて面をのりを領状を
玄玄ハ仏日記をうてうちうれついてこの大ぜうをて山城を
ふをの物一けをとたを。をやつをををうちにく武異をを
をんとい人ハ空なをやとい鳥もあり。九月四日祇園林をハ幾

内を國の勢たせ（きむ）ものすてなこ而こ家ゆたたこまる一ま
ゆ　こま一ま一揆（キ）く薑（タウ）こ家（イエ）こか幕（マク）のらん杯きひく（あい）の
ちの国　歩ゆ山ゆ　ゆ　ゆ　

鵜刑ノ亟丹波朝臣年右　流　鷗茅力先生河尻朝臣　澳住

味村次太郎　小次郎　巨勢朝臣数列　鴨弥五郎　田鳥秋澤

水鶏五郎　橘仲夏　鶉九郎　大養両片

雲雀三郎　萩原高登　鸚少将　梅原朝臣好聲

ちゝ丹法勝寺乃塔鳩僧都俊寛ハ淺茅ヶ原ニ花田の帽

子ヲて暴以て蟻ヲ筒九ヲ長刀ヲ世ニ名を鳩うち

ちらく来るいく流ヲ拂ふ法ふ法ひはわ法ふ二名字ヲ

かきりて義ふずはんをとくはふとる堤鳩の義を農業

ちりくれてはゝへ来うち見ハ奥をくりかひくしく羽ヲ

はくとん矢一法わひてはわとゝもせる上横の去ヲてゝ又ヲ巻ひる

とゝ城の中へ入ヲを男人関乃本ヲ多くを、ちててひうて

ちてかをまうしつけて座きてゝいんすを月ヲるひまをゝは

ゞををハわるのすをわうて農業をうとして世間橋を

抜群ヲんやちくをりゝ生地の風情土をてつらを始と

いりをゝ六月の土用ヲ今年の年の穀の和市を多て見情し

てその斗升の数をおさて来秋の賣買をいくるかく土

民百性らを志ヲそかとを世諦急ハ拾ふる和てゝハ本をと

仏ヲ儀もはゝをとをてゝ自然兵糧國如ゝりを作付へく

ひとりゝ山城を大きゝに怪んてさんは始終
と使者ふ遣はしゝ中ひそめの子細吳今殺さしめんとな
さるゝ毎に入御まとゝ仰く悦ばれ兵糧を注するすは
ゝ敵入ゆるゝいさ波一方をハ出羽とそとゝ入うとそ
領ばしけ見と先とてわつゝ二千五百余騎たとひ漢の
軍勢ゝとも此勢ゝてゝいさ有つなともいひあひゝる祇園林
まハ山着到ときいてけゝくといひ出ゝる去云かゝるもの
字とよゝくゝ名ゝと差到とゝくまで
雑兵第一尉桜田胡ゝ伊春　其子二郎有春

同二郎　李春
鶏漏刻博士宮朝ゝ知時
出羽の法橋ちゝゝ
鶏出羽法橋定覚
鵤鳩兵衛尉秋向朝ゝ如鷹
木兎義次郎角明国
箱鳥源五郎鏡作希代
鳶主殿守頼正
そ北勢ちゝとゝ共人ゝ法ゝゝ孫ハ宮途領紛もなき大概
着到の面一万三千余騎也ひゝの代ゝゝ小ゝ数をゝゝ

鴻大和守大鳥誠臣
山鳥判官赤染朝ゝ長尾
鶴主水司水栖常夏
梟本工兄谷朝ゝ法保
筒鳥平子郎吹田春末
特牛鳥平内太郎車持武春
鶯次太郎田中高聲

あまつ風情ゆえ[ぜんきとえて]をもて買をもて盥盤をいとなむ
ことに田畠をかり田狼籍をもて徒才に杜林に入て見搜
ことを用ゆるなかれ方技をもてひとりいとなむの服をも
ちてへて法を迦[ハウシ]あるを知るも也

第六住吉願書　後見烏恵日登向教訓　城用害事

さても山城国ハ美濃料[こりとと]まで大きなる敵遠くして北の方に
安撃寺[ん]と北こそ[ん]ハ新たなる佛神乃ちかを形そなへまつる弥
ハせんなる寺と氏神住吉左目なる馬白太刀[白太のなさなり]種々に捧物
あらて願書をそなへまつるそ北こそはまいり

諸命頂礼書社大明神ハ都寧天上男内院第二大士高貴[たかうき]德王大
菩薩[ぼさつ]天神七代初ハ国常立尊と云ふ是袁筒男神と現ぜ
[ぜんこせんくうおう]給復国家の方ある仏を墨江の亀[ホトリ]ふ新向年四[ツリ]と
以ハ芸利物[ビ]ふ新なる方ふ和光菓弥大覩の内沈[ハさいやの大うちんよりお内沈]
出ふ取紙を成給をこ[ん]ひるまハわ[ま]て四種ある拙[たバ]武器か
家をたたけ彩[ミシてハ]和歌の仏を唱ふ云ハ意菓北思ふ[ま]へ
いさ[ふ]ふ疫の閑ふ澤[クタラひ]ふもたかむふ遠[ふんとを彩む]ある云ハ病魔[ひやりセキ]
ふ心をくるし法一ふそ己ふ死[シモン]云ふ命[ミ]も形[ケ]ふ平愈を拡
[こんとをを彩て]宝祇を唱る祇徳ハ心ふもも高く吳敵を防[ふさ]く誓形ハ

あるとも深国の國なる人の人なる豈吾祢カ子孫
迷ハ則内弦幸信の月を遥ま淡海鴻の秋乃浪を照ス外用
陸孫の花ハ文を津ち浦乃玄の外を莫を本地の功徳を沿カ
利生余聖の蹟へきなく伯祢の乃ふへきなく物ちの丹
林、玄とりふ拙ある不屑の身を以て綾急と恣ま醜
陋の形を忘く花奢と好、憍慢カ甚ま芳ハ屬ま絶ち粧
意の所ち正素ます狼狽を致ま細これ乃則不肖の
恥辱を招ま所ま乃憤を散ぞんがらめま横ま義急を
転ずるとせきるへしと云ふ敵軍山野ま沒耳雲忙ふ震

ふ鳴ち楯を曳猟を麻服て いくかの万とま数ちあるを仏
方扎勢を以くかきま咕ま九牛の一毛を以ち極ま正素
引写カ家ま むまを て 数ま 篠ま衣カ 蔭を継絶ま 蚊鐵ま を
咬勢を ちまとりへ共 名ハ蟷螂車悔ま 茅ふ ことカ 秘ふ
祢ハカ冥加を ふ ちふ ふ ま ち 彼暴逆を退ることを えん
伯祢四所ハ祢 形信を 構書社 現合カ せ カ 移へ 願
書如件

島崎元年九月日

山城守津ち朝臣正素

とそ紀ちけるかの形をとよふあれハ海をとて秘的細文

あてれ殿忽ち振動して神力天よりの恵風れ胸ふすぐし
かうんと笑ひて乃神後よりかゝ殿矢杖音して
艮卦を唱て切時に西方歓乳乃涙ちとまりの中を渇
作の為り肝を砕ぎい為る南社八幡大菩薩同躰吳れ
神明うて他の人よりも我人とちひあひれいそう使ち
とハなてかゝへきと思りかゝて下四七九月ゆる去ら
方ハいく乳保定れあり時る思ちさめしと赤に
日ちてのくまりさふハみにもあずして六日ゆるさ
まりける九月六百ハみうのくひま天一神戌亥まあり後乃

鳥いく殿ハ四十歳未姓南の位ゆ也壬の年ハれ為ま八一生
不用日也又道庵日也南ハ乾まあらて天一神
乃方ゆり金乃悪日ハ方ゆくをれ天一神の方ま也き
て是非ゆひねる也山嶋も四十三ゆ中七月土姓
の南ゆれ同姓ま第ゆれ百かれゆたゆまゆ六日ゆくハ之
歌まとゆりけらまてい西ロクゆ入て利をゆ和ゆゆれう入音
ゆ土用ま入ば土ハ王。木ハ囚ゆて王相ゆ為ま南ゆハ休ゆ為
一条ゆ帰ま入てハ木相土ゆ囚ゆて相対相生男まやゆ成へ
いくまゆ之めをとも土用の間をゆまゆゆゆゆ慈して道庵

往亡 伐日六蛇七鳥八龍九虎十悪日 此八方ヨリ凶なり又
大禍滅門狼藉没日八四ヶ九二世日四不出日五墓十死赤口
日此ハ日すまよりなるへきなり多分ハ不祥日也指神斗賀
神日塞ふさきなるへきなり方也明日乃ち合戦ハ大ふ利なる
ハうしろとらいつ口説ついまもなき敵をさしてを
て去日亥日とて師をたちまいちうかうせう延急来
練乃正躰なり教訓ヨ拘ひ沒今をそのまハそのし
往亡日といひ十亥日といひ人一神乃方といひまち集め
る亥日九月六日ハ合戦を定めりるうそ
もいのさ海ハ生ふ丑生田東北鳥居門ヶ方ヶ花脚を立
て今月二日海ヶ北ヶ山ハ一ヶ雑波ヶ乃諸ヶ方ヶ
いまを上ヶ及ヶ方ヶ
外郎ヶ
ヶて
寸正素ヶ
本城ヶ
門なる
ハくるハ

高堤をうちせきたてたりなくるめいてたしてを泊瀬川の古股
まてを入れ〳〵そのうへを乱杭打逆木をいて堀のめつらを厳垣
密〳〵ゆまりの内堀二重三重なをいをせむるといをを蒙へき
城をいのこを多口が陣ハ神宮寺おかの地なをも是も四方
大堀をめつらをかを敷をめるをもけをを是を極をいのく
して其中路をハせめにくみをたとひ城中をせめ入を
をもを地をををおかをしをハ法ををををへ関路をもみをを惣城をして東ハ古門か
西ハ中路の西ハ水
西ハ中路の
西ハ水
西ハ水
西ハ水

ゆへ[illegible]と[illegible]ハ心協[illegible]さる[illegible]知あり[illegible]昌[illegible]

仕者の端れをため[illegible]てゆ[illegible]ゆ[illegible]

第七西素師行着甲冑次第八陣事

西素ハ合戦仕定まいく敵ハ大勢なれ共二手まちて[illegible]ハ

[illegible]ハ大雲[illegible]て道狭の[illegible]

[illegible]中路へ[illegible]ハ白川へ打出る[illegible]中[illegible]

芝[illegible]ハ[illegible]南ハ川也東も[illegible]

大略歩立野伏[illegible]又合戦の[illegible]城[illegible]

利[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]中路と称[illegible]乃通[illegible]の[illegible]

[illegible]人歩武者ハ[illegible]大昊[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

武者[illegible]ハ[illegible]敵[illegible]強[illegible]

城[illegible]ハ歩[illegible]て[illegible]

[illegible]の能と[illegible]敵大勢[illegible]進[illegible]ハ二[illegible]

騎二百騎ヨリ少ク候ハヾ味方小勢ニテ敵ヲ
不取ヲモ不ル牛ル思ル事ニテ候ヘケレバ堪ヘ難シ
而ルニ我方ハ敵ヲ見ルヤウニ候ヘ共特ハ人ヲ愛シテ
ヲ思ヒ敵ヲ指ノ先ヨリ懸ル者ハ百騎モ
くとうれしうて敵膝ヲ屈スル所ハ一国ヨ
リ多いてかくへ。ヒとり立名ヲ上ケ
ヲ惜ミ並ヘ独ヲ連ヨリ小勢大勢ヨリ
陣敵ハ多ク一陣二陣破ル時大勢ヨリ利ヲ
ヲ得ヘシ候ハヾ味方ハ小勢ヨリ一旦利ヲ得ル功ヲ

ヲ一味同心ヲ以テ又ヲ人ヲ助ケ敵
ヲ遂ヒ申ス也ヲ思ヒ合ヒ敵ヲ懸ル間ヨハ敵ヲ騎十騎ヲ
合ヘ一ヲ以ヲ合戦ニ勝ヲ敵ヲ
ヘシ武者ハ男ヲ力ヲ有ヲ事ヲ
ヲ人ヲ伝ハカヲ人ヲ
仏ヲ掛ケヘ一不ル
ヲ力ヲ有ヲ者ヲ
ヲ面ヲ所ヲ有ヲ信ヲ
ハ出ヲ旗ヲ也ヲ或ハ八尺或ハ一丈

好まる同旗竿の長さ或ハ二段又二段行脇ありて旗
さゝまハ只測の竹をきりて旗をさゝ大将の家紋又月な
ハ七郎ハ矢をたゝく頭のあるをぬけありてえりまた
みぐる物たくぬけいてたゝ次郎もこゝでま
り抜羽也七郎いまゝ師ともあはざれハ奥ゆゑの着
横ゆくしかりなり信乃ぢいくゝれハ孫ゆゑ
見とも着物もあひもへきようまハ次郎ありといひて
一番ゆ手綱二まハ小袖ぬりぬき三ゆ大にちのぐう四ゆ髪もゝ
五ゆ鉾巻白布八尺寸六ゆかけ七ゆ鎧直垂八ゆ脛巾九ゆ指をひもぶ
十ゆ胸当十一ゆ頬貫十二ゆ脇立十三ゆ小手十四ゆ鎧十五ゆ刀
十六ゆ大刀十七ゆ征矢十八ゆ弓大ゆ次郎かゝ
まかりる今程いるゝ法式ハ八幡ゆ奥州下向の時の次郎也
一上矢の編ゆ二色ゆ羽ゆ二の矢ゆ。又羽を四ゆ
けるゆ。編ゆ大ゆ竹ゆりて四ゆ二ゆ一ゆ
口伝ある或ハ弓ゆ藤ゆ口伝ある。又大ゆ鎧のゆ毛ゆ口伝
ありゆハ小ゆ右ゆ
盃ハ形ゆハ左ゆ

を[illegible]て[illegible]を[illegible]の次第なり。春は義あり挑ふま
ま細あり一陣ととるまこと二陣と序破急まあつる習なり
一八陣事東[illegible]諸葛亮八陣図を造ていく天地風雲
龍翔鳥虎羽翼蛇蟠なり。又いく孫呉法李善の雛
兵書曰八陣一まいく方陣二曰圓陣三曰牧陣四曰牡陣
五曰衝陣六曰輪陣七曰淳沌陣八曰鳳行陣。又孔明
八陣に奥鱗鶴翼長蛇偃月ホの陣あり。大ち多勢ハ山河
をおまあて少勢ハうち深山をあつて峻嶮ハ防戦の
たよりあり。又少勢ハ河とおとりあつて一篇にすす

一その日附の[illegible]ハ師呼乃言をもつて合戦の勝負をもつて
さ生ハ作あり一ちする附ゆ[illegible]ハ三度初かりそく孫法よ
ゆ[illegible]勝附ハ一度ぐ[illegible]ハ法ゆ[illegible]ハ敵ま
いちまに上ふとうけて[illegible]大き百戦古勝の御ち山城ち
いちくてまに奥見めまる初師ま持ちる奥見ばくまま[illegible]
よ紀ちどいふ[illegible]こ[illegible]ハ大略ち[illegible]ばんしゆ[illegible]ハ[illegible]
いぶ世よしたお用ゆべ[illegible]次好となふ[illegible]といふ附ま山城ち
ち鼻なにしハち刀ま[illegible]ハ[illegible]といふ信乃ち七鼻ばち刀とち
[illegible]世ち見るかをもあり[illegible]一ゆりくて[illegible]ハ[illegible]

ゆハめさていうあもだ平記ろくさ紀づりさ一そうそろくは
よいくうちあさハあのうちうそうぶりと正。信のちぶいさくめる
ちカをりらそハ思りもさけぶと正ハ一はさハ物まあるを孫ハ
妙いさ見ぶうち行くゆ大ちカしめりそうそハ仏の社用まうら
ゆ沖ゞ愚成ろうぶりろ信ののうそうもうそゆちカは
めるかくハくゆ七尺三すゆるうそハちとあるうまりいるを
見れハ久まも七尺まもあまりうんと行ハ一紀ぶすあるうも
ま三首さうそすりだ ゞをばまたぶうりとまうそを
いて分ちハ厚まりちくうり柄ろ尺ほみすまみしうり。信ろ

きこれちカハ吉家ろ双の名作ちり多羽院の供ゆ見ろ作ゆ
ちカをゆ正人とりていうそーうちうん祇泉荒まあげ入稿
とゝ赤くかの池ゆ入とてきゝ生ちり人性をなて見る稿ま
かのちカをとりいてそまうり稿孔と名ぶく或後風位人
平賀吉郎豊をそちしゝ諏訪大明神ゝそうりうそゆ
稿孔ゆ一作ちりぶまそそ倉もかるを大ちカまハちりとそハ
彩ろハをいとりけゞて杉ちうそ侯宜ろちくかハりと
ぶくるを柄ハ長さゆり紀也ろハ聊見ゆまゆれゞいるゞぶく
ゆ也。大見豆ハちとうでるあまる。横ゆるとゝ。ゆハりろ侯柄

なり 秘蔵にハまりなくゆへ 七歳 帰名 まいせ 雪とふ如雪なり
めるこそうせ〜ハくて よろこむて 祇園林の奴原 やつら るとくあるりあひく 手薙 テナミ
と見をもやとそいさこけるさて月余のうち奥を思るく也
ゑを ゆ ふ ゆ ふ ゆ ふ

鴉鷺物語

下

法本ノ九
ノ十ノ
雨条ヲ
三ノ巻ト
ス

ノ八 一 母衣次第　正素嫡子折櫑　嶋越後ノ上洛事

ノ九 一 師多分　九月六日合戦　鵜飼善萑縣捧事

十 一 鵜燕義書　生田森鳥兎門尉ナ死

高野山佛法僧牒狀ニ並返牒事

十一 一 鶏禅法　九月廿六日合戦　移路ノ条故心事

鵠鷺記下

第八毋衣次第　正素橋子七郎折檻　鵠鷺後守上洛事

むかし山城国にわさ田ありけり年四十二成りける年よりはちとそ
なりひさ家にすまひしてとて郡司なりける仍を見きんとや思ひ
けん家をいでいくさハ　軍勢のかず
そ出ありけるとのあいだ中武紀有　又白系も出きたれハ陰陽乃二色
なりにたるとき老武志かりける也　治世の縄なり　天の天尺
見ハみ大立佛を表すなりハ八の八尺なりけ十九丈なり腰ま
立の吳名なりけ系ま口伝を数カ十二なり陣まよりてか

ゐる母衣合戦乃節ニ依てかつゐる母衣勝いくさまかる母衣出立
ハ母衣。討死の母衣あり。縅袋ハ赤地乃錦ニて師子乃口をまき
をゝゐる母衣をかく母ニ口伯あり。乃ちさゝ也絹。入る絹母衣裁
附の図 伯ともに口伯あり。をさゝるまちゝひあり十二まとり十六ま
とる熊谷平山ハ六枚ハ某師の十二大乗を表し 十六の羅漢
摩利支天の梵言乃数を表ゐ母衣の裁板乃ゝ秘ゐ也 図
名誉自慢すて祈りはゝ ハ乃ちゝ也。やう ハ乃ちまて
しそなゝを せて四人ゝゝもちきゝゐとゝ述懐し ける
山城国橋ゐの七郎を折檻しゝゝゝゝ乃合戦ハ乃ちて

さハめゝる大事也 見ゐ法いゝく歌ゐ ハ乃ハ へ ゐ さゝゐ いゝくさ ハ 形 ゐ
とゝもとゝ べ ゐ さハ ゐゝて ゐゝゐ ゝ ゝ ゝ ゝ 斗也 けゐ ゐ 教寄 ハ
ゐとハとゝゐとゝ ゐ ゐ 武勇ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ 心中 法 ゐ
いゝ ゐ ゐ ゐ 熊谷ゐ 橋ゐ ハ 小次郎 父ゐ ゐ ゐ 合戦ハ 附 心を
いゝ ゐ ゐ ゐ ゐ

ことはをたち素練乃をれハいかゝ金をすてはとたばゝを
見ても急なくして安益か死をいそくゆへなり命と義と
軽と取とめてこ義を以てをもんずるときんハ金石還て軽
く義を後て軽ぞる則ハ塵芥も両重進中あも臆ある退者
まも甲ある又一足も退ざる所あり進退こゝ大事也男士ハ
学ぶべきこと
いかハいかなる信心あつく又学問すぐれ悲をさとり乗
和を勤まして安欲なかゝハ正憲法乃前ハ日月星宿おろし
の雅漢
まがりいたゝさるを加て信力堅固ハ家ハ和ぬ宝乃冥助
自然ハ来るさるあらくふ名とも行ぎ決定乃死をも猶

を邪見放逸なるハ宿力拙ハ行ぎ。ハ異を為るゆへ
大死をとゝるを老年ハ病久遠をおゆくこゝろ安乃丹
て甲なる名ハ上乃理をたいく未練なる臆病なる人
也男の分ハ法を一大事ハいかゝ一分をたゞ名をとゝき
ずていこゝを仍とり恥あるこゝろをもて子孫
うとしを
かてもなるべくゝ孫よりいハをんきよいをひるを死をとく
いたゝ物の名をのこさんを内をよくちかへを次第也
又敵をハいかゝ附子孫もあを二子孫もあきをハいかゝ
物ゝ中孫百孫をを乃中ハもすくれくすもものをす

うえうを幸ひにして思量まわりぞうちあハすんきをそれ
きゝ成るくいさゝ進てゝとるあり其下れ甲れもの也とやく
うゝ中れ甲れ和也ゝとゝ中れ和也ゝとゝ云いすんの武士ゝと
の物あひゝたくゝうひて宮の悼をきんてちと為めゝ事ありそ
き八名別乃る也員戦ゝあつて引立取て只一人うて返さる也
上の甲れ和也ゝ其実乃甲臆八員師ゝあつていみゝゝ欲
狂ひうんゝ一重あり命とうんぞるゝハかくのゝくゝて機根
強盛ゝして千里の外ゝゝゝとゝれ機ゝすゝれハ計を惟幕の内ゝ
運一勝を咫尺の下ゝと高祖もの給ひゝ其ゝ房ゝ武
器乃いゝゝゝと嘗ゝ行ふゝも也ゝとゝ死して功をゝとゝゝゝハゝ其
也とゝ人共独計て敵をゝゝ其ゝあかゝし武家れいゝゝ
むゝゝ立れりゝあつてあゝを行ゝうゝゝゝゝとなきゝ
思ゝて心を陳在乃ゝ義ゝて進てハ敵ゝあひて双をゝぐゝ退て
ハ工夫ゝ向て計をゝてゝせかゝのゝゝ命ゝたゝゝゝゝ平生ゝ
ゝく思惟ゝれハ死ゝとて別ゝしたゝゝく我をゝてゝ古方ゝ
わきゝありと思ふんをゝてゝゝゝゝ自をいゝゝれゝゝ為ゝてと
こゝ伝法ゝゝゝ世法ゝも通ゝゝゝ機也又真心を嘗ゝゝゝゝゝゝす
思ハゝを動揺ゝゝゝ真心別ゝゝゝ頭ゝ物ゝれ工告楽伝

恨折る付く物よう〳〵寸動きさる心地あとひ大石泊男山明て来
体芸こそ真心の命動きへらるあるす大丈夫心こそ也又恥なる
かりそ死るとてとて命を塵灰のごとくこそつる物あり こそ
甲ありとやきんたとて命を玉ハ宝と知て犯人あるくいるよ
関門よりるるごし板よ射ハきりあるかでもうをとてる
とおるく名誉とす人こそ敵急よ為出あるへ行く異見を也
きこの世又きりむきふさひよ弓枝の間にて敵を射ぞる
ありこそ多坪をきるねゆへ色きせきい大略敵の頭をまわり
異見をまりる敵ハ何を働けるぶ矢さぶ名をかくへ 源

牧光敵を見るる月れ牧乃こそとの猛へりさるる乃名将の
敵をむくふこて眼睛のうり猛へきるひ〳〵出中根のもれいさる
臆をる雪山をを思りこて名将るるもかくひるるそ好
ハよう〳〵嗜こそ肝要と横をいるきんが乃矢をこそ親
こてあり〳〵物のいひ〳〵ハ人こそ五度十度こるあひく高名
れるかをひるる心こそ九十九度こぞをこても矢一百度ま
弑度あ〳〵勇士といふハこるぶ性るこそ多度を度くるあと
わこてこそといひ〳〵みてまとこまれる今弁四郎が詞を侍の
甲臆ハ死てなこてハみしどといふ体けまと考こるこを程の

一たるまむうて行のんそせてそをくゆゝしくくをとしるハ
日本一の来往の奴せとたゝ帝大よまいるまあへり軍九月
六日さゝ陣りて行越後ハ小国とて一時ゝさゝる
むをあつて後のるゝ山くゆきさ一ゝそハくゝできまへける
あつさゝ多ハ始ゝ死名のゝてかくれたゝゝ
いゝ京をを泊ゝゝても京をとゝゝ堰川を渡るゝ我
国のるごゝもいまとゝゝさゝと思ゝゝゝを渡ゝとゝ行
出放生浦ゝごゝもなく砥並山をつきゝゝ多々の京をゝ
れハ高信山も霞ゝみゝて越中国ゝもゝく栗栖ゝ

峠ゝゝゝゝかゝ国ゝでつきゝまける行の橋今渡あゝゝ濱ゝも
ゝゝゝハ海風すゝく寒ゝゝみてあれゝゝほゝゝタゝれま
篠原の宿ゝでつきゝけゝ無為別当ゝ感この篠原ゝて
うちゝゝゝていゝ紀ゝゝゝゝ名をかゝゝもあれゝ芦ゝて
なげの弟結の子孫までも昔の人乃ゝゝゝと思ゝもねて
掛衣日をへ多をおゝゝてゝかゝへるゝゝゝ思ハまバいとゝゝゝ
まいまゝなくゝゝく社の家ゝゝゝひゝまて
いゝ一の人氏ゝゝみゝのゆゝゝゝとゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝ越ゝのゝ帰山とゝゝて

出（イデ）て よろこさ
七里浜とも おしゆけハ
るゝ久しかりけ
あれなるわ
う黄昏
ふりぬ陸奥
そめて 旅人
勅撰 よいん
ゆら矢とる
ゆ

筒名二平丈鳥 春季。花名源氏鳥 希代 歌かち鳥 高麗。こ
さ紀とゝくゝ七勢之子余騎 歩立野伏八数を
ゝ夜を
大丈夫大将山城守 二素 橋子七鳥 吉ゝ雷次鳥 如雷 吉鶯 信乃
当長高 鴫 鉞 ち高 玉 琴 左中将
年右 弓力 先生 澳 位。味村小次鳥 数列 紀
二千余騎 擬 ゝ 鶴 紀伊 長命。水口 位 登位。略 泳
次郎 秋澤 水鶏 五郎 仲夏 鶉九郎 両行 霍 霍三郎 高登
蛍 伊 紀 ゝ 百余騎 ゝ 歩 武 伏

只例ハ搦手ハ一にかりとして信乃守むかとの者を城まへ持一
きけ野依の左衛門ハ崔九義ハ さきもんべ皮の服巻よ
法師甲ハ柿色の弓ふくさ赤糠乃弓。秋二毛乃宋そぐる
やなあひ形一族若党引法師てかとの出るかうと出とる
一方射やうの引へくも見てうり山城ち門出よ酒をのむ者
まハうの武千栗也弟乃兼ハて酒をういて九万八千九軍神
まを向く軍神勧請ハ九とくも此軍よかちうり此敵どうち
にの武と咒してまをかりて白旗一なぐ出せて西乃方を
まを出るこ日乃仕衣束あもーあやうぐまハの出門ちへ
ものでこありて
これも又ちをとちる乃里ちはむうーあーれ名をのこさ
くやとうちあるわ詩ていてくとそればかりとも中路
まくやくつきよりあるの越ちうちどまをゆげーうば
精をして書状をよむ若党ちよいくぞれうちーま
せば前を敵まとうーあーとも分乃毛をばうあつかていうん
ち僧乃前国ちもたてまつれ安上の妙乃ま国て出発ま
進ちんといひときーうてあうれちをとーてうの合戦ま
うちごます

九月廿日合戦　弱退若崔懸　樟事

祇園林寺ハ東乃ゝく二条ヨリ懸きんと議定しく大ゆ北大路ヨハ
東市佐玄　鶏漏剋　侍士　知附　鳩大和守　誠長　山島判官長尾鶏
出羽法橋宗貴　鶏白水司　常夏鼎　木工允法保木兄弟　鼎
明日　特午ヨリ　辛内太鼎　武春　狩　夜ヨリ　鷲さきと
して元弘勢一万余騎なり中ヨリ鶏漏剋ヨリ立ち向ハ
南無関所神とかして一揆乃あひたちに　五四ヨリ　つけうさきよを
して元ヨリ鶏を木綿附ヨリ　といひうん　搦ヨリ　元ハ　紙の右ホ
尉　仲春　嫡子次鼎　有春　同　二鼎　孝子春　雎鳩の兵衛尉　如意

白糸乃鎧ヨリ　毛の白生白北　甲ヨリ　日月ヨリ　雲ヨリ　白鳥乃左
右北小ヨリ白みヨリ　胸前ヨリ　白刀ヨリ　白羽乃矢ヨリ　白ヨリ
踏ヨリ　ヨリ　世ヨリ　白羽の矢あひわきと白木北
弓　持ヨリ　左目ヨリ　白鞭をいくらかけて　ヨリ
かゝあ門ヨリ　ヨリ　ヨリ　

大和四条乃橋とうちわたりて京極を西へ出雲地の道祇
祇のおとゝ三条よりひがし嶋大和稲大和元興寺のとなりまで
山名判官祇園乃とをりまで大和東京依中略のとをりまで
ぎをんさうり掘まハ常田ぼうらの出く法勝寺四条高の馬場
といねへむらく田畠をすもかへく只例のうりく中鴨の芝
まで世ぐらい此ハ九月上旬なり此ハ稲葉をとるなり秋風ハ蹟の独を
玄ぼうへ雲母をひる稲葉ハ甲斐神社やてくすん八幡宮
偏初明後一點宮灯と欲滅時大ま掘まわしまで一夜ま
時をぼうる城さん時をぼうせぐらい中まん鶏の漏冠塔ぐ一門の

時のこゑのこ類四類八幡まもて東ぐ山無もの此ぐ高ま崩
河多元ぐ此ぐ後くわきかへぼうと笑くぐ言戦矢さけびの
声嵐しまで此ぐ大和黒糸乃大鎧乃黒つけ高ま
同じ毛れかとまくぼうぼうり乃ぼうか常く黒ぬま鴉ぐるかき
ぼけぐる矢軍二ぼくぐるかしく黒塗れ弓持く烏黒ぬまる
のかとぐぐ玄文の鞍をきて わきと黒靴けてそ赤ぐるけ鎧
毛ぐぐへつ立ぼうり大音あけく ぐぐの大和東京依林玄
ぐぐまあり山城反へいぼくまぐぐふ無なぐ芸矢玄とり近ぐん
ぼき世ぐぐを換ぐ換ぐ世よとて十二束をはぐて ぐぐ巻をて

さるの国まさ[illegible]の山城さの吹かへし筆うらしてうしろま
ぶかへるの鴨助の冠の板まめのるぶるねけかつて宇の山城さ
がいくうけ毎りる程の猪兵うてハ山八ハ[illegible]わさもの小兵
さまさ[illegible]ハ兵部やちんとて十三年三伏ひいくうる放矢まさ
云が弓向の神つとをつくうしろる部人ふる弱わ程法橋
宣兵が胸板押付うけぎと伏さハるよりちさまおちる
生年五十三ハ例の門系うてきぶ板をためてうせようのさも
富貴しく法嶽愛岩ま坊いまま持く児国宮傳さし
法師寄さ兵懸さよとそいひあひくるまま城めるよる
雑兵のつきさるべる猪を二三疵ねけく悩大和さが鞍乃お物
ふうれいて板目ふさ兵ハ根ハうる北とくさるさの香うて白のま
鶴乃羽とおがきをしまぶる十日来まあやわる鶴越後さ
生年四十二とかくを来長矢東也兵が方よりハ山鳥古鳥ら
さる手矢ま物をを健とをしけるざらるてまま方けがをあやんて
昭刃宣をまれ而る弟木菟板有る鵜寄どが一類乃ふ[illegible]わさ
らがありさ毎ぶるしく貝をそぶくるして敵の笑待とちるねへ
板中ま一合戦仕ちんとて一名字一揆乃業ま百騎ハうるとかいて
うけるさ先弟本工允法保板有本菟ねえむさしひるとさるり

けくてうけたく城方ハ敵しうるゆ事ハ堀よりそひく待
うる奥見なき堀をうきこと取をうるのえうをさうとくて
みのこと
蓑とあうひておつる命を差合くてうけとる武者と長槍
弓武者をもあてつけをるてゆくつ　このうちてみて
孫がよる死ゆ事る夜師ちまハ本陣のうち陣ハ後陣ハ次
かきうきうくて鬼竟のつをゆ二三百騎一手もとうすうまよ
うり狩をゆめぐとあうしく歌ひ方ちうゆ見てよせゆハこハ
いるくとさうれ立くるうてうて塙ちどうるなりねど山城ちゆ
五百余騎群ゆ出けるく玄くうしが見ていく歌を待
ゆ出りかり破てとをうゆハあまり九大勢ゆ勇士うるゆひも
まうまうて高名ゆ曲ゆ事しあけたき出乃勢やとけ和合しそよ
ゆきて七郎次郎と五乃羽ゆすうてよせて乃大将東市佐及ハ
たたのついさにすみて
いたくうぞ甲ハ山城ち二山寄ゆ日こうゆ自嘆ハそうた
びようゆべり見と大吉揚て大将乃玄久うる二千余騎が中へ又
百余騎ちゆ一乃ようけへ玄玄見を見くうれ一やさて仕同い
つる中見ゆかくんと思ひ一山城及うを一ゆくく勝負をんとゆ
山城ちたたうゆとよぶとて父子二騎五百騎がまつさゆうすん
で同ゆあるゆどゆ大昊見ども同ゆうう一立てうけ見バ二千
余騎乃そゆ勢中をつとぐ開ううけるうう乃へつとうけぬを

て組ひくへてこゝまで後ハ又る場を通りてつハものその数たる
ものを敵あしくまゆりてみしる面を父子三騎とつてかへして
又一文字に破るくとゝりうけてかゝりて七郎が敵を遮てねあひ
をうちまくみゆる供ハ次郎がさ紀をたゝりくよりあひ着まと
むんぬきと寄り山城守多勢にあわく敵ぬ後をつむ供ハ七郎
次郎たゝせありせて二騎まゆりくうけちうすゆるとあるハ
忽ちうちるあり左右ハとせ迫ハ又たゝまゆりたく速ゆるう
電のおとし物ゝ二騎まゆ父子三騎目ゆ原の敵とつて
北ゆ地ゝ寄りゆ西。ふよりゆ南よりこさ後よりこゞかひま
うけとりてこつうう笠右ゆ一度ようちよりけ迫ハ法
方ゆ百騎も二百騎ゆ成ようゆ山城守ハいく敵ハ強分北物とも
うゝきて左ようよわりて見へうゝ。北次郎ゆうけちうきてハ右ゆ
七郎ゆ次郎ゆ元ゝ左ゆ死をよとて四五ケ所てあひ
ねた七郎ハ右ゆ左ゆつきつゝ次郎ハ小かひる射させて森ま
陣で入しゆ。軍ゆ大略ゆうきて右ゆ左ゆ枝ゆつきゆ
鞍乃ゆ右ゆ左ゆうゝ乗れゆ時ゆ物日つるくと出
敵ゆうゝハゆくえすゆ而ゆ者ゆ鶴信乃ゆ右ゆ三
百騎ハ梶ゆ尾北幡一流ゆ北ゆ流ゆ北ゆ組ゆいくいきへゆ

玄大言あけて敵ハ小勢なり一騎も一のますなとて組まれたる
寇竟のつハものとて大勢をつとりこめ迯いうちやぶつてたんと
いでて大ぜい大ぜいなりてゐるとも人をそどきりうてもりう
おそれしきりたるを樊噲が勢と多ー多房の術をほく
して敵をもとりこめとも久をみぢ蹄乃責ハ怒雷の天を動がごとく
鈒の剱ハ電光の雲を激するに似たり多勢を以て信濃
より押寄せて嵐のまとふ為弟のおとるまてに百騎
かーこれ二百騎対を立てくひくるゝと又十方より押寄て
本陣へつとかをあどりてそうれハ此方二百騎をうかるまつて
たゞひよ息をそつきけの掘をするも打明より合戦をはじめ
ぬ河のふくしして敵こゝをべきすかなるとてだゞとばかひ地ぶ
いくさをうも弱紀伊ちらいくさ大ぜい晩亲なとハをうども
今ハ敵よりもうるさしと中野ーて大ぜいくさ社躰をうん
と中信よりゆきあはさる略、孫次郎いそくかひをきやんくか
なちまう法義元暦乃合戦ま宇治川をぶるもうるせば
うるうるうるう

花形ヲ名とよばせ　玄花小三郎為朝　弓勢也矢ひとつまいら
せんとて　弟二伏よいてゐあり　ちゝべの小太郎が　妻くまの
ちゝろまろまれせてたちーぐぼあつたれ　名あり　母小宮
崔骨　ホとて　一家　ちつとぞ　ひける　維太食　ちとは
ちかひ　ゑ　蒼　ちとて　手　繰　ちとて　嫡子次郎有春　同　三郎
季子春　父子三騎　手勢二百余騎　川　ざ　打入　ちれを
みて　みさごつくり　ちとべと　紀　て　敵　三万　騎　ちれ
むくとうちいれてうきぬ　虎　ぬ　ちし　城方　ちも　世
伏うち立　ちとも　ちとと　先途　ちせ　ぐれども　ちと　え

ちるに　ハ　拘　射　ちきる　ちえ　かへり　みて　おちる　北岸　ちあ　其
ちる　蛛　ちけ　ちく　城中　迹　ちる　矢　庭　ちち　物　も
おろーち　出　ちて　ちせ　ぐーて　ちる　乃　けど　ちる　ハ　ち　用　害　ちあり　ち
ハ出　ハ　又　ち　陣　ちゆ　ち　ハ　ち　ねのぐ　ね　で　ち　ち　ひ　股　芋　ハ
ち　ち　て　ち　ち　ち　息　ち　繼　ける　事　鵜　紀　行　ち　ち　ち　ち　ち　大　ち
いち　ていち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
門　ち
ち　ち　面　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　ち　ち　牧　甲　ち　大　腿　脛　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

ちの方に鞍をいてうちたりて六尺寸の大長刀を手俣にかき
なをりて門へ入らう水口の信兒暗乃一名字永鶴藤雲雀覚と
さけをしてそれ勝負百騎ばかりわれ先にとうちのぼりとよせ
門まへ仙石うち一騎もなきに取りかこまれさと打上く紀伊乃
守ときさらはてんでかくれきに敵ハ五騎鞍ぬき脇ぬきとるとも
なく奥をさきて言ふ初めてうけ一番乃大勢散々
まけちらしうち入り初ハ敵と名乗り紀伊乃国の大長刀
食よりうでハ法よりー楽ふるうハ志乃たぐさり曲を退とば
ゝまりなく甲北浦の神ともいハぞうちたるちたるちぢ

るもも志乃奥をまよいのうる原の初二ちうずといるる形し
あらうとうらふそのいきおひハ永祖乃陣を芝とまりて古本と
さけーまてうち紀伊乃ハ勝いくさーて二番ようちよせて
志川くと門を流して本陣へうち上く初へる陣利仁田村
う鬼王をかへー手柄もかくやとそおかしうる中の程を大長
軍ハ敵ハ方永頂死多おかーー実死辛生乃初ハ粗をうち出朱
まいくさよりてけもを手よせ乃特午多を初るすく
つの国まりてそ宗かへうる鶴の編冠博士らいく以前二ケ度
の合戦ハみな敵乃利とみしうりさを原とは方乃損をるハ

ゑうて扨あらさま依くも敵ハ究竟の勇士にて居るやうま
り老武者なり一騎と箕乃手まうて敵うけいゝハ一味の兵後
をたゝみく皆逃をはしきねとち出ハ小勢大勢の敵をて
ゑをとる陣じきまたる大勢乃成敗いゝ丹毛不足なおろそう
いつまて世をうつ岩べをいぐやうけんといふまて八布八尺の
紅の大四方火炎のたとく川風に吹をて二手余騎ゑ中ゆさ紅ま
ゝ抜けく進てう城の方ハ山城守父子二落ち蔦伝乃ち長高
結城後方高岳そゑ勢合て八百余騎にてをわいて駆ハ高岳
の陣衣東ハ白糸乃大鎧十布一丈九尺ゆりねさ乃大毋衣雪山を
ちぶうをくゝけふくうめて
耳毛をもゆ乃異足をゑ面笠毛九るゑ信象をとゑおとくなる
ま蒙く六尺ゆりの古刀を顔ゑちーぐ多駆ゑ九進で
みゝうゆぐく兵ゑもゝぐ荒中れ鞍助鞍取ア巡路号カ
先生味村小次郎をちきとてを勢一手余騎也爰ま信乃を
寄ゑ九るれうてゑうと見て大音あげくいたく敵乃ゑゝぐてを
見る耳あり、いゑ毛ゑ後ま心を賦てをーへてうちゑ左右ま
目を佐くけぐまるゑと下知てゑをけれるく大勢ま脇差て
弓毛ゑあひつけ兼ゑまそむけ多勢なを共ゑで ゆる耳をば
うけぐ信乃ちが楽うゑ井上立二寸あり命ーかれうる也

敵ハ三百七十や八十乃大勢ともいへ共てゝ下ヨ見くだして
きれださーうけぶひて玄奥さ井を敵乃小ひぢ弟楯北つまと
きつて打とーうりふちー内くみとハ込でんさー おとーきる丹も
けく丹ちすきを法をまりて迫退を計く軍兵をとゝーかす
海てとま一騎当千乃勇士丹ハ左くひとみしくり鶏の偏冠博士
ハ田衣をきうおとさき甲をも打おとさきてこびゝ丹さーゝ世誠ま
多乃ちるゝひーうとくゝ首をくゝり赤く成くたゝふと絡
誠院ち大見見をとうけべしぐんじとうてハおとー 打とあてゝハ
打ちもう敵てそまきあうゝ見宛ちつハ二十騎うて

それ丹ち婚大和ちをたつてて絡誠院ち世まあり大和ちハいつく
ゝそ丹ちー水日ゝ乃武勇丹ち嘗をあゝて聞しそう高世ゝ多
あゝ師後ぞよ 計死乃敵ハ不足ち世共さうとてゝ多ゝ丹仁ハ
伝色あゝでハいゝばてそとて八百余騎うて敵人ゝう中へけ入て
大和ちをとーあゝくさーちんてそうせるけるそ丹死殿ハ敵方
まゝ乃ちを帝ホ之貫文ち徳て遺言乃ちくゝ毛をハ僧まゝて
まゝ乃ち孫の業懐まきとーけゝと赤ん山城七郎 ゝると射さ世
打ゝうて大ち乃。打く関くくまあるゝ物あゝ岩を毛金を毛
井ちるさんとうつて廻ゝる面を向ゝその前ーあゝる岩武者

四とり進てこりいるなるわちくんと思ふ特牛弓刀平内左衛
とゑ打て内甲まとまあてまふくこる頬魂まていくこを
ある八山城七郎殿と思ふ中こり味またくれ刀そまりてまハりさて
おいてくゑ是非ゑにがゝゞゑまるけゞくんとて四尺あまる九長刀
ゑ車ゑ法ハて合をあくゝ殿山城七郎とゑの者ハ小軍九を つ也
ちゑ刀よこゝと八四人共ゑ五くき荒言ほくんとて大ちゑ刀抜くそゞ
ちてわこりあゑ特牛弓長刀をとりけべて内甲まゑつをとこむ不
をゑまへくゑ奥是ゑ者ハ柄ゑ長刀もゑ者ゑくけゑとゑて
てや者ハ奥是ゑ いゑまて 弓ゑ殿ゑふたをくゑつとひらいく

小脇をすゝて打どうゑ。ちゑ刀抜ゝて目と鼻とをそゝひ
て胴板まわこり つくまゞうきゝ死ゑをての左弟良坂やこめゑ抜ま
あゝ抜を二番ゑあゝてゑ ゝゝ敵多勢なゑ者ちよきれゑ強
ハゝゝゝゝて ゑあひ彩と左ゝず者ハ共ゑ云ゑる九合戦ハ
沖方員いくさになりぬゑゞ陣を用やとゝいふゝて ゝゝれ
さ紀ゑとひくゝれとゑ膳病抜ゑあゝとゝゝられてゑ刀ゑ刀ゑ
をゝて 逃ゝれハ九月六ゝひゞの刻ゝいくさぶゝりゝゝり
あゝゑひゝゝゝゝゝきゝゑゝゝゝゝゝ

仏れようもとがてとみしらわある古屋乃いたく日ろろ
いひしいられぞらしろうき時ハいろわもいとゆもてを行とも
ろうわ方とも人とたあたべきる武勇乃ろとハおくびは
たてぞみるうもろ腹いろきき花奢風鮮とのきおのみて
人ありてハ腰をり慢してハ千とつろひあき鮮乃すのいく
ろりあ〜ぶとろふまいろとろ風情也仁も不肖も老
ろもろうきもそれ乃どろいのろもいて用ろもつけ手
よりとも遠者方ハ面をまハいくらもまきるへしろ甘ら
我ろれとぞれろふハあ〜もろ紀よろとぞろろ一也とゝハ

乃程無拾して。是非をいとろわ乃。冥。無その教られし
中ま大和國三瀧市まありける鳥うられまろ糸よりて祇
園林ようろうれハ客鳥の伍出とて賞翫けるまいくろと
ろてらの乱いてきろわ。三瀧を出一附ハ父母ろも書ろろも
やがてうんくとと唱てうそ出てうあちろあき世といひ
みうろうとまろ矢とる身とてかりそめまいて一ろ乃父
もろてねろ一ろの家ときへし一そあハれなる鶏出羽法橋とハ
東山ろるあまようきいれぬ児同宿北嶋げきゆえうわあし
法橋のいと神一ろうき児鶏ろ夏とてありとてに多紀殿

まをこうける時ゝ乳あまりこゝろや

第よくゝる者歟のゝこと也るゝハ乳のこと也ゝ乳ゝ

さて七日くよりそ〻ゝてゝ乳くの業橋こゝゝ法橋ハ八宗

兼学ゝこゝゝれハ殿密乃先ゝどもゝりてあゝハ法華四善

論をゝあゝハ理趣こゝ味をゝゝこゝゝ誰庵をたゝ百座をゝき

いつれも叡覧ゝ遊給ゝ聖ゝ九日ゝハ等師と倩ゝて法法

の会場をゝこゝゝ則登高座ゝゝて外分表白すゝて

くゝゝる京ゝ北書ゝ後書を訊誦ゝ作ゝく新ゝゝ訊誦

をゝぐゝゝハ道ゝ師ゝゝゝゝ人の作歌誦を感歎ゝ給ゝ其詞ゝ曰

敬白　請諷誦事

二宝衆僧佛布施　一重

右、志願者先師聖霊法橋上人位誤法身修行の門をゝく

弓箭乃杖乃塔ゝ没ゝ遠来甲子を考ゝハ八十有余歳秋

緒ゝ夢をゝゝび移ゝ烏兎を計ゝバ七々五旬の光景ゝ

海ゝんとゝ法ゝゝ更ゝ法ハ哀傷の涙影ゝ弥新ハ別離

北腸ゝゝ伝ゝ今日の役場を伺ひ仏法の功徳を仰ぎ

九乳の梵音を叩て十号ゝゝ聴を驚ゝて嗟、呼霊鳥

ゝ乳ハ昔乃知音頻伽ゝ伴ゝく法をゝゝ西刹ハゝゝ生ゝ

きんのてくらくこうそう
移雲遊ぶ系を極凡厭有頂云間鐵囲沙界春蝋動
合昊同往仏果恥如件

鳥籠元年九月日

中子敬白

かきんの芸もうたいつらとうたふ神ぬうしん
導師此答をよろこびぞく用よむとひ給へハ満座ふ神と為る
ゆゑ其ゆゑ居言喩因縁ふたつ かつて 鶯谷の春をなべ給へり
ふ仏ふるゑ志して荘厳劫の月すでにむなしく三界さとぐく
成還して歓喜園ふ花遊ふ菜毋凡聖貴賤皆有情の理を
居ふ。胎卵湿化何ぞ退没の風を遁ん仏界魔界とふ

離別の恨を懐く。多類畜類寧衰の憂なうんや
抑先師聖吳有為の美ふ見ぬ間浮世機縁ふ無ふ八ふ天ふ
作ても留ぢ生死の別離地ふ叩ても遁ざ冷暖の理恨歎爲
鶴元年の暦一期運急ふ傾く悲哉九月上旬ふ假ふ世ふ好長夏
倩往事を顧ふ白花のお云ふ朝ふハ美京を法歓山高ふ詠して
紅葉の秋ふ美ふハ逸興を愛宕の山ふ偲ふ都芳の院ふハ持
僧ふ美ふ禅ふ丹ハ雪護仏ふ治中多土の英ふを出でハ
二男火宅ふ理ふ仕と利ハ南拍小山領の覧ふを勧てハ剛
毅堅固の門ふ入ふと入ふを他の芸をみく歓ふと

世乃禍を免れ給討とそ為るんをたゝみ手統員を拾そしゆ
るあけくうそゝ〻へ〻ゝ也おうりよの〻ゝ一化名を著く歩を費そ
寛を知ね娑婆世境八苦乃路也といふをきく讃偏そ北
教ゆ中ゆゝ人のゆ徴偏并を一首のゆ答そ〻の〻生をゝゆ
勝〻漠漠乃魂をなつく苦の下ゆいつゝゝゝゆゝ拾ゆん
そ生答ハ和国ゆ言をくみ七五七とゆ白毎を五大を仏を懐
世一字ハ赤生如来乃云間頂ゆおを除く世一れを表し又世一
尊を讃嘆すゆ切法あるゆ〻みゆ神とゆあり生とおもハ
すゆゆゆ等乃ゆを形る亡魂もいゆうり法神を赤ゆ生のらん

退義の法恵をハはゆゆゆゆ利益ゆ生ハ成仏するゆうゆひ有へゆ
寸後ゆゆを牧言結語と懐し給ん大摂化現のおゆしふかくハ
赤のゆをゆてあをひ拾ゆゆ赤を法大を菩提遠勢をあひ
ゆ〻ハ附飢を懐を片思山の答をもてし独答阿姫乃答を
ゆてをさ生ハ鈴の尾皮乃流生をゆ拾へ哀傷の私答悲涙
狂をあゆゆ老情迷魂ゆゆゆゆ

只今我命を捨てて初陽無事乃法を受けとうけるも
ひろ豊北をたづねるに小子すべかくれて世を一紙の
ら免れなる行方一法情とかみ病者の日をうけるる
きく宝海の恩顔をたれ一紙寿れ法華をもさる也法一会
戦場をひらいて自然の法わるるのまゝよ我の法となり
法ひろくむなしるあとのりもをまも法ひ一ほんの御ひる
だまきんゝなくゆるやかもくけハいゝるのゝ眼ま
ありとゝ云魂魂ハ曾来て為ましるを高一ても
為ハ師匠の恩須弥もよりべゝ須弥一ても須ハ同宝の為

香水を注すゝ欲世意ハ師長の為ま弥陀を頂戴一鈴を度
を鈴孝ま養く法花を讃嘆一給へハゝ我功徳大ふ一て
仏智を討ぬまあゝ世を法花ハ銀多羅入乃妙典ま二会
之の真文なる耆山領閑ま乃朝ま世雄安堂尊れを懐を
那一鈴林涅槃乃夕ま八教を子月連ホの憂悲を抱心象大師ハ
鳩鳥毒を吐臭亀ま出ま死す一象肝ま絶一て成仏久ゝ
ず尺一法一の法仏の内徳法華の功徳ま為ま得恩へ
ゝす次ま象ま元が子息の讃あ為ま忽ま逆罪の
罪を翻一偏ま象ま乃恩を報尽法の一願をなるふ一て

太心王乃教理とをつゝひ給ふその功德偉—志ゝ世ハ先若閻
の中丹ゐ明眼をえゝく作ゝまその三明六通乃聖若ゝ体て果
て徒—法々と法を喝—てゝ志とあゝさわず四毎八会の如ゝ
親ゝく覓を唱べ—今安婆れ若聖ゝを唱—て体るゝすと尺
—て安婆男ゝ六摩れ中れ多摩をそて当とすと云ゝく
次ゝ本莞麗ホ乃徹通をゆ中ゝ生ハ本莞のさゝゝ国ハ観音乾
仏を頑て法をゝく此土ハ耳根利ゝ多ゝ摩を用
と尺—て六根の中ゐハ耳根をそて本とす飢麗噪性自
造次顛沛れ中丹—て不動法性乃理を悟暁更無さ

めゝる言葉ハ他の眠を却ゝる—観念を動る俗とゝゝん右ゝ生ハ
平生れ麗行若樓乃国ゝ行て逆ゝ三五
四紙を免ゝ中ゝ死以此功法鶏年本莞麗之男有情増
進佛果一恥如件
かゝ生をゝゝ生ゝゝ—ゝゝ哀働をすと云ゝ生ゝ鶏の孝
養と云ゝ是ゝわゝ—ゝゝ雀小義ゝが妻子乃ゝ
けゝゝゝゝゝ—せゝて生れゝゝ正—ゝ巫鶏を徒—てゝ
義ゝを梓のゝゝかゝく生れゝゝ梅保乃小徒ゝ庭義ゝ
法ゝゝ叩て天清保地清保内外清保宅清保六根

清浄と清じを上ハ花天帝釈四大天王下ハ炎魔
法王太山府君五道冥官司命司禄海内海外龍王龍象
別てハ日本国中大小神祇殊ニハ王城の鎮守鴨下上河内ニ
ハ発鳥部大明神雄黒大明神和泉国ニハ大多大明神阿波
国ニハ白多大明神東山ニハ多治大明神北斗山大明神東海ニ
ハ香多大明神よび梓のうとておどろ〳〵そを迷我郷ハ神
ゐ神明の宮殿ハ土仏地の慈悲のあはれも各納受と
ゝまて是今ゝ〳〵ゝる所の亡者の冥途の語ゆさ〳〵く
聞たまへ

寄人ハ今そよゝくる世そやあ〳〵げの歌ニ和經ゆりけ
ありうとの品今北信用やな宛ゝかゝ乃信用や恥世中ハゝて
かゝてもありぬ〳〵雑雑の果敵なりをかゝらんのゝハ仏のゝをん
今玉乃賊宮ニも後世とたゝるゝ多ゝ乃ゝ
ちゝ〳〵子と男ニ用の衣乃蓑乃ゝ
のゝゝそわゝも又かゝ紀乃神乃ゝ
わゝすゝゝそゝあゝハゝゝ
物と云の物ゝの河ゝゝ水乃村竹のゆゝ
なゝけゝも生死乃雲ハゝゝゝ

こそ命一生親ハ当子ハ賊なきハ祥とも仏とも一生ぞ わを
毋の心ハ百年まても首ろを小蛇乃おそを恙なく手足
乃つまづきなく生さたもでくまれる形ん此と一化を忘未月の
中旬ハ此毋のおこりけて大きなる法華経小中間ろの
相乃笠効つくして梓ろてと沙ることハさいなきーとんえよ
不用氣なる童乃ろまちんどをとりそへてみくハわる成ゆ
ろるなを熱ゝで先そのまハちろぼず いのやうく如とハ忘まなる
へーー返くも又ろすを此ハ供養ろを此ハ安婆のむろー
ろや慈久を此ども来るへきなそであいつとなくねハうきなゆ

侵物とりせばかくいきを色ものを此金毛なりー 真ハ俗死開
律の血よりを此梓の直なのようやうなりーよそ乃ハ蘖恙熾
威化猛となりく丸まくぶの此ハ藤まと浸さを疫蓋六時の苦を
左を久んと思ふんある ならハ尺迦の法ゆをまさ法をのん薦子の
門ま入梓ゆべーはくく思人へなることハをのう仏法ようとりて
心とさいくむくすを此なをわをとゆをせゆ仏をなやまゆ 苦の
数くくば苦もあげ日も久を此あへー 死ゆ小蛇のとを此ねく
てなくりおくて立久るなりを巫ままくくいだーー 已此ハ
くねそでをなり体ーて子薦浸衆薦音をくくそなき

よけき

○京十騨藤義書　生田、貴、鳥兵門、尉ま死

送高野山牒状返係事

城方ハ小多ともおほくいけども佐ま、いつまもあひこゞひのま
なまなまけあくを差の能九郎ま入をうまさハうやさ〜き色
多乃名多ども構倉獄国乃名をくて雲と云るるいら
いらかとあ〜ま為り夢もそれいとりの中也ち〜を社日といそぎ
つかへらしま乃合大納言ま入廻文拾てそうら〜使をつつひ
てあのよ〜とかうら〜久則とつてかへ〜ちて正豪をんつきける

侍乃義理まことまもつて遁云也かな正ほの乃多ま上も弓矢
とる分ぬなうひとて仲ま法をぬ乃みちゞほのかゝれるまあゝまぬ
よそ乃うらあを乃たが神を志乃ま志ゞと云るあうり乃中略よを爲
乃かたへいたく金多のるハやまとよ乃次藤ハ吳鉤の多色禁獄
ぬ乃法法石使の次第也他国の思るとゝ別法の情をて敬ま色
いなんやといへともあまとゆるさずそれあうしも苛ぶりの爲
かゝらや尾の白きがあうて皆めうゝきるるあひて法冷泉
院の法附こそかく法爲と色に国よるとゝてまうれるとかゝて
みをら色さうゝ久かね内侍

こゝひなくよるおもしろきこゝろゆゝしくぞこゝろまるおもん
とよみ給ひけるなりる是ハちごろおもしろきこゝろとゝ
侍ふ中略の中人ハ歌書をしこゝ
心爲かゝハ白く成ぬる人さゞ波を蕙乃はゞら
論方の山雀歌ゝこの歌をこゝていくさ波鶯めぐちゝぶ有るやゝん拔糸也
蕙乃ちゝ子丹がつるまよせてよゝけるよ勢るこゝやけハなゝらも
ちゝ成ぬりゝぶてをこゝいるゝをこゝ白よいゝゝまで天下ぬすひん
つゝのこゝをかゝもあく他をわゝひゝ笛を吹下手の物ハくゝでを
さゝちゝゝまゝまハ路をあゝゞ小歌ゝまゝかゝハゝゝ歌ゝる

此情未練とも中〳〵なり。是ハきゝやけゝゞ祇とよゝかへさゝ
とてうち棄ゝる歌ゝなり。扨乃いゝく有ゝもたゞゝゝとハゝる
ゝてハ此歌をとゝ人ハ歌書ハ理ゝま成ゝれハ何といふゝも
ゝゝ寸といひくさてあの爺をよゝゝる

歌乃ゝゝ此歌ゝのゝゝゝゝゝゝゝ履ゝ歌ゝ人
鶯法陽寮歌へ山雀歌ゝとかゝて祇園林乃ゝ人ハよゝてゝゝ鶯
ゝゝとゝていくゝゝゝ歌乃合戦ゝハ自余ゝハめをゝくゝ
山雀ゝわゝりあゝく小首細で一〳〵めゝくゝゝきめゝゝん
とゝ匂ける鶯ゝさゝもあゝ水口ゝ盗乃ハ五ゝいゝゝいハゝ

うてゆきんとゆんいさんは面目もなきやうなきてわきてうぶ先祖
ゝてゆーえの。盛をめいてうりけるかとよ郭公の皆乃料を
ちらく兵法はをーをて兜角をるまるたゝ分子死をり 附名
今をむらーを忍いて〜水巴のあるひをおひゆる郭公れるさい
洲分ハるゝもくれゆ色あれゆ今子洲ゑをゝ水巴を多をもゆ佐
ゆりとぞかりは祇園林子ハ戦捩 正体なるを子生面、春
より発脚あくいく洲る一日会戦ゆーを周朝ゑをよ
んて佐方れ戦西ずきて囊鳥乗門尉西宮坂乃佐状あそ
りて多れ絶子は服ゆきて生西門をゆまを佐ひーをゆ

て糸てゆとて佐をゆーいぞを見ゆをる俄を佐く佐ら
乃師大きを捍矢力競童河海を満心野万木雷乃指れを
聽るをけられず破る西ずゝゆを坂敵ゆーく進退惟谷
西れ絶を乃んぐ佐方乃ひくさすてゆ西ずゆ又生死れ洲長忽を
到来を弓矢乃義昭佐ずを遠背をんの自害ーて法庵を
ちぐゆ恨ゝくゝ居と死を一番をるゆをぐるをを長武が胡塞を
因ーを怒書を到来鳴金を佐仲九ら唐帝を殺ーを穴穂を
恐恨を古佐云を展分ハるをつるを西法乃浪を志ぐゆむをゆをも
魂ハ何ぞ東心乃林を翔ぎんを不宜導云

九月六日　　蓮爲東門尉

薄上　東京依頼

とゝ書こゝ付るか是といひは是といひ大火うちけして高野山の住僧佛法僧といふハ爲の數と云ありかとを舟てらんとて

誠條送ゝ此云

祇園林爲鳥牒　　金剛峯寺衙

独り一味同心乃人多を蒙く仏法僧の威力を恃て逆ふ

を於中略乃住山城ゝ山ゝを退伐し今整を雪と清世

内外多牧山ゝ隠遁乃客あり世勢利養の業を厭穿ぶ

出人多の居をトゝ。世人呼て。仏法僧と号彼を謗る則ち

氏族爲者の一類とゝ此ゝ依く者多を蒙ゝ邪を

鴉の巣ゝ成ゝ仏法乃大底悪を罰し善を賞ずハ天地の

取裁ゝ罪ゝ免ゝ知く是を依天の罰あり而ゝ正ゝ

の心猛悪ゝして又放逸也事あるゝ生して他を和し難ゝ

玄膳ゝ穏便乃性を受て貪瞋内ゝあり瑞ゝ見てハ眼を閉

横ゝ聞て耳を塞悲哉　王者　明とすゝ聞ハ詭ゝ是を乱

狼公藉重発して苦山乃ゝ苦ゝ茲ゝ国て今月六日義兵を

起し中略ゝ時乃多矢合鶏鳴ゝ始て大手搦ゝ五

ケ条に及び火を出して戦名を揚る兵恥を忍び侍命惜むべき
の廣故還て重く義を重ぜるの倉石沢がごとく嚴八屠所の
肉と重き血八涙底の門を流れ引き踏る懸葵を掠士卒乃
師呼吸を窺をりその多のうまをんで雄雄しくまりて分方を
死元年
とよぶ弓手。戦士氣を矢て合戦ぞ陣を敷きもりぞいて
さ移て計を廻らせ切を無を射る先力を出して打死さ
矢孔刀折いまく倉を若丈三宝の冥助をこのぞん八何ぞ正素
を誅殺せん凡則 他にでる身命を切り寸況その伴黨
といてそを設困居隠士力分さりとも年二類乃恥

を助げん余者山中北佐多を悪弘縄一迷疲る糸長占
八一婦く迷急るをよぶとちの生故牒。

鳥羽元年九月日　東市佐林真云

とかきてそをとりけるを北返條るいく

高野山返牒

来牒一紙　祇園林衙

載らる山城を正素と誅罰一其憤を敬ぞへき事
空稱ま仏ば玄如一色ぞり雖ク異を論ぞん法身を和ぞり何ぞ
若無を分ん能とり人共元初一念乃迷固忽ち本来具足仏

を失し顛倒妄明乃妄雲忽ち昔仏如法の月を隠てより以来
二界六道の沉淪を朝を知ず宝を我が物と多生乃善因
を酬ゆ事ちなし孝を西教を通ずと雖ども空しく優曇
花の現ずるが如く盲亀乃浮木に逢で錦を為る如く而今一善乃蓄ゆ
石火を敲く法教て仮阿鼻焔焼乃苦を悲像往数多と雖
ども黄泉乃苦を免れ休ん親族眷属とは伝で焔魔の裁
断を恥ん哀れ安心ち一抔の塵を集むるが如く山八八葉心蓮乃如九品浄土花ち也峯高く
雲聳ゆ。山深く鶏豆山中色眼ゆ有ん事を攀者八四非
障悉滅し彼ゆ居ける輩八出離遂ゆ進ん事ゆ依く大師
宣乃僧ゆ倍し二宝乃法号を唱て一心ゆ仏果を祈る如ゆ不
急乃僧ゆ頼と聞る心を怨し思る腸を断類水の浪洗耳
未法首陽花薇食ゆ尚飽ざるべし山後深山ゆ居を
改むべし谷後幽谷ゆ所を易べし熟思屋観ゆる況
ゆ八破戒妄慙乃罪名を当ゆ八途八跡乃苦ゆ況ん憂
ハ是永二世花悪地を失し久く三悪の牢獄ゆ苦んを言
語乃所の次第不可説く仍返牒
葉如爲

爲嘉元年九月日

とそ思へとうけ」活字板以下数葉十二はとりろうこく

永永五年五月活字ノ全アリ借得テ本ノコヨリ本ヲ校ス朱ハ活字ノ文同シ

○第十一　鶏漏短慢士禅法　九月廿六日合戦

移鶏ヲ殺心事

高氏は北朝を見そなはしたのうえ京都も同心をずいて十余ヶ
て鶏漏短慢士禅法を知附がいなく京都ハ寺さへうまれ中せん
とてそなを依て合戦を留へきなあ寺を国ちど狩も仏恵き
うこひ伝へ〳〵ふ変乃合戦をとて「分まとつて」寺産を存する
間お屋るあへ生て二変法めまかはへ〳〵寺ハ其望よくと
うるとそへ初るあさひよ常ゆるれ大和国細田関を赤ば

義分ハ思るをくるまなくて仏屋をしいはるを毎か
もくあなるるあへけ先方を国〳〵関〳〵法社乃鶏をる
らひりり小野の鶏ハ合力ヤ〳〵くらへ八情よりの神軍ハ
細ありて毎ゑ。藤田ハ位会と一族北ちるとて加陳をれ
をはを実〳〵るとりてハまび毎坂関不破実須磨関路麻関紀
関是柄清見て法の実白川芳蓮法松和泉実出れ〳〵とは
して法四関〳〵九面〳〵方陳をさ〳〵をいて寺会力方へ〳〵と廻文を
いくさハ来ハ七日とそちさまりけるさる程ま九月廿日あまりまも
寺ロ〳〵ハ中路ハ面〳〵つどひ集合して今度ちゑハををを

をくくかゝゝあいゞ若干の勢をふ（さう）全又敵ふ与ふも
大勝感へ（ときこゑ）陣分たれと陣 鉦鼓ほ多死して一
方の方わけより雑俵を相いてすゝをたの手ハかゝ時の
たゝかひ（合戦）阪方大勝神ゝとて〻安の合戦敵方
与力を国よりとゝせおりこと此方の多勢を以（と）風説さ
うゝまりゝ決定こゝへ（いたらまつへきとゝ世）阪方より
敵の一数をたゝつくる位ハ八幡八騎のうゝて旗
太鼓法螺宗高をつゝたゝさゝ五社の内勢武ハ者と
或ハ旗とかりて警固をこゝ（こゝ）をのゝ（むゝ）ゝ恐懼
の思ふまゝこゝて掌を合てぞつゝこゝゝやまひけるあゝ
かりける神ゝ感ゝりたまふ高ゝいく先ゝの合戦ハ
敵をこゝすく思ひてあるつる若ゝたゝを正ゝ用ゝ
ゝ（や）ゝて（諸事ひかる）ゝ（りて）ゝ和ゝとゝ（うゝと）ゝ為ゝ八幡位ゝ阪方（スハ）ゝ内勢
ゝとあゝと警固ゝ引率ゝてむけらるゝと（うゝと）ゝ同掌ゝ（いくさ）ゝひ
ゝぶゝけまけて蒙ゝ（モウコ）ゝ神ゝ（カミイクサ）ゝ帥ゝ神通自在の矢（ぶ）
さゝゝ何ゝ有ゝて（す）ゝ手ゝ毛ゝ
警固ゝ八ゝとゝんゝゝ
へゝゝゝ方ゝ

よりさかをのぼりて又あくさ成くまいくさのたちたを
そめくだりける山城ちうこうさ山勢を雑兵共武者二つにわけて
雑兵ども小島今藪里まかりてとき。野伏ともども畦道
の大路大原迄まもりへ〜よせ来る以前も鳥乃一数こそ去
ぬれ迄きるもたちかへ西こうま。こうろ儀をたて一味とすくる
をひくをもかくも乗ぬ。伏ぬ。此方ハ河原中人ども
物くひくうんとそそ乃時敵なにの思あ。なくむつと
つきうんとする時一おびきくて城よりつくとてかんま
敵あきをの云勢を一ちうまけやうんとくらん。おをもへ

うとあくんて一合戦火をちらさんと時敵ハ懐の出勢加警
警固のいつくを横合よりかばるあ遣して或ハたくあ
或ハひきちりをてよせるはいくさをとろをなん時ハ
をく所の新兵いうを大勢の勢そ防士中そもうしろより
時をとろ所ハ大勢とハいふ共こうあ
てもをねぐ一ぐ列牛列ハ郎とも川をへ〜防者へるぐ
わんまを面をみ条迄より兵庫。肥後ようこそ射殺
ま世或ハ門をひ ひて鴉の餌 者のえうつ原ま
ものをんとハ西こうを防ハ山とそ同 しけいくさ時ま

定まりし紙園林よりの一校 知音の衆皆ゐるを出さんとして
曇陀羅を着て夜中鶏を切りとさずいきてゆくとて
金打して神水をのみて死ぬ いくさと死をちぎる合図
者の六字の名号を首にかけ法花衆い妙法乃字を立ぐる
しるしなりの知時 禅宗にて黄なる大摩羅うちかけて
赤斧の鶏いくさも毛ばきを赤糸の縅をきるが摩羅より
ぬきて黄白斧の振るをみるかけ知時がいくさ宗の
模板をぬぎかけ階級を立す位を踐じ直よを分る叶
世尊霊山会陽して一校の花を拈ゆ所所の大衆曹ゐ

是をあつまりて摩訶迦葉のみ有て独咲を附す世尊迦葉に
告て曰吾に正法眼蔵涅槃の妙心あり汝に附属す 兼阿
誑す勒を不前乃偽化をり断絶をいることを莫とうく余よを
たれくく南那和頃優婆掬多以下ゆを伝て今に盛なり
六乃花は是見聞覚知のたくらべ有あ智恵思量の及ぶ
るあるべき文字に依て教理に預を究竟してを仏の物ぞ
と見るべし 然とり人共未十歳の禅にあるべし宗乃初問
家人一法宗いづれもおろかなるべしとり人共 武勇は禅のこ
お意きり敵をお合て切ん一と打合る 単敵のこ別に

法師　法師の模様いくはやぶ法花会に八ぐひよ大を摺
うるひごとはいまの世のわうう　の法確牧ぶ八ぐ千とたハ
ふ迷々ぶ法花経のいとく。遺恨おほくの八共ぶ合戦中ハ
いぞう所ぶ所ぶへさとぞわうひけるぶ法八九月十四
日迄八東ぶ八菓子秋そ九鳥ぶえ紙園林ハ林間
ま酒を煙て紅葉を焼石上ま竹を頭して緑苔を拂ち
詠して此所ハ酒宴肉食日々狩ぶ也大勢餘集のるなぶ
宿りを屋形もあ八ぶて菓物ま切り拂ってきくを思るも
麻の袴ま又うるそるかあ　この出のぶ肉のをといつ迄行の

きますこうあと薪もすくなく拂ぶ迄拂ぶもるるま
ぶのうう拂うあつまま家もるるもさるるもまるるまいて
うるうび衣服陣の拂ぶそ拂うるもうどま雙紙の流ぶる
くま文毋書ぶ九ぶうぶて九ぶ或いぶしちぶいぶ迄ぶて
ん乱して　ぶて思るるぶ一て写物ぶ内わうう拂ぶ
うり拂のうぶぶのふ袖ま　ぶかぶそんて拂ぶるぶて拂れ
なるまぶうるぶま国ぶ方ぶ九ぶ物ぶも　ぶるとあ行ぶり出ぶまい
以ぶ　ぶも大勢ぶいく迄八九月廿七日五文の天ま九ぶまて
大ま擬ま迄ぶを九ぶ近里ぶを村ぶ　ぶて九ぶ諸方ぶい

足長にいてひとへさとの矢あるをうまてとをまうる見ひきわる
るたるまいいつあをすくみはすんでゆ伊はちとひさるでをい
かつはけるをす城まて つくりんすとといてゆ〜て大をいうて
たるかゆ。乃全の大納言猛勝まて大れ言うくまわるとあひすと
言云今とを家後と思ひきるてえうありをうつをうまつゆ〜
いかへさまいいつまも勝方みしけるをまる思るかれ北あるまの
彼方経言乃ち勢よこあひなへかゆ言いあるくまてうるうと
言きるとうくを鬱屈対抗をきるくかとやくくるくく
を八うるうる大勢をまを伊人見をを元つきひさびきは

記く。紀附きてをのをまをちはを処よといゆまくるを生勢を陸
八うり一見をちりをそ今。をを強者信乃ちがくまをうけあハを勇士
とくのあひあをまを琴をまるうるあひて毛花をちくして
をうをを業武者ハちいうをまをくわづるを一騎当千を武兵
ハうりをかひのをうりをのありをりを胸屈をあるる其中ゆ
碁の盤乃上処すを陣ずく弱の見をを入ををまをく風凰を
本毋を成るく八方を面ぶり能絵角毋ハ威を振るく南を
ねぐをその働をを似をうを面あつ河面ををきをまるつ山面をを
をを。一人も生残ルとをたるをを敵を拾も佐方ハ草已会頼を

成く歌いやまーーまかさあるに多勢よ云勢多ハすーて
紅附切死く一名字百騎ばかりの梅をなべく一処よ臥云
云さとていつるかひなさ拍とも武とさハうり乃大勢いくれと
なく敵よ面ふくさてたのミたる一方乃大将うさまる云念
さよ云云まるるばーふくらんものさるきり死とて真勢
みな百騎ばかりふくるとうてたるかよ処よかねてあいいのとく
小畠今義里などよるる。附のるを拍もおそるーくつくりけ
るさべ乃後の敵よ慶ふーてくる南へむいてゆく。云云勢
ふる騎ばかりて敵をうけ面ふりて出雲川をくるりよ紅いく

ゆく面を眺ぬい堂大将大系定の手より散くるを附るかくる
大略ハいるさきこの系を南へ紅くはとも八くるかよとつひさきま
てうるさねまくれ鴨色水司あるハーて大勢よをけるとこあく
さてるるよもたるきくるーーぶ多ぶくるのなさべ一方うちをあい
てうーるへたるねけハへとびいるて底をくーアくむくひのさー
まくるあるり分ぶるひかるくくるーて中路の面くハうち拍とるて
ハハきくくとも水徐ハ出大するを面ふくて立くるーーハ歌あさくと
るて紅くを円満院大浦源兵五てハるるくとでわあさける
云云ハ申百騎ふて祇園林よにけかくをーーま歌つくいくせを

さうると哀れ〳〵ハちうゝあく見よハどもをバ悲ビせて熊
野乃由緒のわるきバ之山を祈んでな意を達をんと紀伊
よりいくちゆく五之國の用意ハ我〳〵ゑる長堂和尚
浦のゝゝ警衛乃強どもわうあひ久ハ熊野へもうゐハを
〳〵ていりでの狂おそりけをつゐでせ久ハあゝを動し
〳〵て爲のゝ形ようてあるる拵うの城とハ紀南要衝の切所
紀州第一の要害也峯ハ半天の雲を拵ア谷壁万仞也
道傳さうゝく一歩誤てハ千尺の底北微塵とならんすゝる
かひなゝ或ハ嶮とゝ或ハ斜まゝて偽一丈余ハ関ま

のそめハ百万もいまゝ傍へ〳〵をとめ中函谷関ハ険難も
かくやと思るゝ為ゝ山城まゝて思日たとい正素ゞ
天下の強をさゝ〳〵つゝとゝ骨あゝで一ゝま若ゝたゝあん
仏の系と思ひゝま運のきハめとて手のそめとゝうゐおちうせけ
迷ハゝてゝもすゝて山孤をてゝひゝく元秋山まのゝり奥院まして
仏法僧をゝゝ移ていくくわゝを不意の天ゝあひゝく弓矢ゝとゝ
中ものけゐハ打死をゝも仕らず加ひゝあゝ命ゝゝへて是ゝて弱者
系ハ世間の恥辱仏ゝゝゝまゝゝ今ゝをいてハ是ゝ若和
徴とゝて近世法ゝまゝゝんと以へハゝんハゝの合戦のおゝりハ僻

ゑ[ト]ずなるやうに京道者ねるとりゆゝしあひさ兼りて宛[アテ]勿体なや[と]ゝ[ゆ]ゝしき文[ふみ]をよゝび[び]は[ば]ゝ[ま]ゝ[ゆ]ゝ[ゆ]ゝ[ゆ

四十二ホの玄明乃根本と御生又三身といへハ法身ハ法性仏一
如の理遠悟不二の性報身ハハ和成乃の如来 釋迦 出現の姿
修 業 して成 ぶつ 高き 難 して 為 る 法門 猶おろ〳〵
ひく念仏なれ〳〵ハ法性上人も多くひ一代聖教を学と
いふ共智鈍根の凡人乃北分ハ成く一向ハ念仏ハ〳〵とこそ
仰 ま ハ又浄土宗とて 張 西 西 ぶ ま わ ま こ る そ ま 炎 く 法
門を建立 弟 把 を 偏 る 念仏 ハ 晩 出家 なゞ め こ や
すくうがへ ま 念仏 ま あ ま そ ま ま ま 貴 方 ハ 文 光 も 出入 な
げ ま ハ へ ば う 往 生 極 ホ の た ま と ハ う 都 ま め て ち ア ハ へ

と ハ 爲 ホ の 孫 他 仏 貴 ま て 九 ホ 往 生 乃 階 級 を 、 内 ハ 家
上 生 下 ホ 下 生 乃 様 ハ ま ま ハ 上 ホ 下 生 ハ 開 悟 ま き
て 往 生 と ま せ ハ ロ ま と な ハ 仏 ホ の ま て ハ な げ ま ハ 又 下 ホ 下
生 ハ 浄 土 な 生 と ハ へ 共 或 ハ 八 幼 或 ハ 十 二 幼 蓮 花 ま 浄 ま ま て
開 法 の 益 ま 頂 て 見 仏 の 微 咲 と 開 遊 ま さ ま ハ ま き 往 生
安養 界 中 下 品 生 人 在 蓮 華 中 常 聞 弥 陀 観 音 説 法 て
聚 托 乃 蓮 華 の 中 ま 空 成 の ち と く て 化 仏 化 菩 薩 ま て
説 法 と な ま と み ま り 又 鳥 阿 弥 陀 仏 ち い く 行 る 者 ま 極
乗 へ ゆ ん と ま ま ハ ち と ま 地 獄 ま 行 る ち ど め ち ち き と ハ ま ま ハ

都と人とよ合仏のお意よそむきぬとなりてある合仏者よ
罪深てゆゑに地獄よ怖ぶるしめるゆゑ用よいく勝気し
ゑるる余りおそろしき地獄よ怖い恩い欲
あるゑるのかる渇いやあるゑ合せうやうよ尽しるは
先哲の眼目をえつゞ名言北取論もちるとなるの大事の
お言ハ地獄よ落ぶお言仏北不憂ハ(さあるゆいる服疆
脇よ記しあ法時ハ地獄餓鬼道よ落るぬきをもを弟と寸ハ
天人勝北系よ誘てあきをもを恭とを決化よ恵じて法孫
よ言ゑ慶ちんゑを大乗のいるるもんるるていハ(りまいぶハ法也

ゑいとそ思ひ(ゆて花香よあゑゑちて活計をんとハ
いゑゑ大怒りけゑるやうまハゆゑちりとゆ共撰る勝劫あり根よ
上下あり化他の益ハ法を説言ぶりまづ地獄よ落ぶと
思強てひゑやよ法ゆ会といハありゑくハとて生北戸乃
あけんを拒北ゑゑあるつけて事(て思ゑを西方よ運ぶ
とりあるなく行すゆ(てを作りけるゑ丹心城る合戦ゑゑ
かゆて閻魔ゑをハめよいゑるる宿因が催(ゑんちゑく浮世の
変化て親ちるよ五ゑ(合戦乃ありさ海遠厳筆をちゆ
長状廉てまづひてゑ(を我慢情識も片附の戸となりて

いきたる蓬(よもぎ)がもとよ名のみ聞て胡蝶(こてう)ハ顔(かほ)あつて世路(よろ)よ
誘(さそ)ふ夕(ゆふ)ハ白骨(はくこつ)となるく郊墓(こうぼ)に朽(くち)ぬといふる今夏(ことし)
ちるまで世中うくてそなりまさるもつと道心(どうしん)おとりて
此(かく)ハと書(かく)者(しやう)屠(とこや)のおいふを耳(みみ)に聚(あつ)いまてあけくれ
うちうつぶくで作りける

作者(さくしや)ハ[illegible]さ[illegible]ひ[illegible]といまたりなるふ行の杜鵑
恩(おん)ぞ此翼(このよく)のよりこをむ有(ある)[illegible]てかの[illegible]のかり[illegible]
俤(おもかげ)をうつぬ[illegible]ハ[illegible]云ハ返(かへ)て[illegible]思ひ[illegible]ひ[illegible]ハいふるなと
ていであ[illegible]ぶ[illegible]れ近世者ハ是(これ)ハ[illegible]といふ処(ところ)ハ[illegible]

伊(い)をはけ[illegible]ゆ[illegible]ハ近世(ちかよ)ふ怪(あや)ま[illegible]て[illegible]
世をいとふ[illegible]て系(けい)ハ[illegible]をさてハ近世ハ[illegible]共(とも)俗(ぞく)の心のうり
ハまつそ[illegible]びとかべてまいりゆうへハ法(ほう)を敬(うやま)ふ[illegible]
んふ法師(ほうし)ハ[illegible]作(つくり)[illegible]きていたくの谷底(たにそこ)よりかうへを[illegible]
[illegible]ふ[illegible]今(いま)打(うち)[illegible]命(いのち)[illegible]ハ[illegible]とハ[illegible]ハ[illegible]とて封面
を[illegible]ハ[illegible]がけるすを見て涙をなをしていくをり
かくハ朝敵謀叛人(むほんにん)の[illegible]をはきたるを[illegible]の[illegible]を
うつふるなる貴方ハ[illegible]ぶ一類をこそハ恐怖(きようふ)もみべ[illegible]
伊[illegible]なりなる[illegible]ハ[illegible]と[illegible]ぬ[illegible]て

法道世といふハ言極とも中つべーわ[illegible]も出乃合戦よりも世の
ありさまを案する今日の福ハ明日の禍なる事ハ一とーて
仏のとまるふもなーるー廿七日のありさまハ嚴ハ強縄と
ふるゝ血ハ跡をとゞめ世一過責一人ハ強る酬百劫多劫
母ハ泣くーめく泥しゐあのぶやうる男ひとりとく出家
仕ゐりんといふ。ちゝはとて髪をそり衣をそり仏ハ出る
字げたゝる驚阿弥陀佛とぞつきけるちと話頭をき
ゝさわゝとて金墨尋常なる禅いなりのハ出なるゝる
白紙の袖を墨染の衣ゝ屈ゐ一切人傷武虚たゝきのまちひハ
者乃ゝあるゝ者かゝりて法ゝ見る入ゝる今ゝ迄ハ物の
しゝとゝる世をいとひ世捨の名字をすてざるハ中人あるゝや有
常住乃昔ハ法乃悟へさるゝ屈れ腕ゝ人き形一驚ハ警鳥
ハ鳥類殺何ぞ天性のあゝちをあるゝ込ハきゝや有ゝとゝ人を
利生門ゝ出る時ゝ有ゝるゝ丸約束ゝ髪をそり衣をきゝ衣ハ
嵐色ゝ一て白ゝ[illegible]ゝ墨ゝ[illegible]ゝ出る黒白不二鴉
警一味の心をあゝつをゝと見えゝり警仏法佛がいゝく昔
三井寺山門のたゝ屈きゝゝらハき坊舎一宇ゝのゝゝ
ゝ六角法ゝゝ。ゝゝ退散ゝゝ。いる俊学者一人新羅の体

宝前にまいりてふかくわが身の滅亡をなげきたてまつり宝前に
して法味をそなへ通夜しをはんぬ
今度の乱逆ハ和光方便の子細あつて一人の山僧を上菩提
心をおこさせ給ふ偽く山王もわれをも大きに歓喜をさせ給ふ
寺門の滅亡よりこのかたあはれあり哀れ為の是を思ふに
今度の合戦を賀茂祇園便過絶絶をもつて是れを所
詮多聞三顔三菩提ようち申さ給ふ神意とありがたう
ひとへに頂をあげ伏て為に法他仏をぎよくとくとも神をこそ
忘れ給ふ為あらじ仏がいたくげやいまへ色をつ[illegible]

あひ[illegible]なりなる自他の衣一色なりて移習心を同ノ、の仏法僧
なりの五なりなる如一色なる色の黒白を論ぜん法身を表也
仏で[illegible]を[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]
論ぜんの[illegible]の我他高してたゞひとり帝尺修羅のいき
ごとをなすとなり今い[illegible]二の伴侶となりて上求仏菩提
をなすんなる[illegible]ん[illegible]ん[illegible]
と以へいれまくありがたしとそよろこびなるかくて三年斗を
ふるに法の神三月あるまに海[illegible]法門為いつ是本業と
わきまへてこそたのもしけれ[illegible]

すゝ〳〵戸山乃草庵に中白髪老灯万意空貝
葉寒く殘て坐作夢一万年に心事樹以脚とゝひ〳〵白居
易か頌思ひ出て窓氣辰と痛〳〵め徒然縄と消
茶に酒又に飯共陸寧寥一境中に所あり〳〵るり
玉い伯ゝ〳〵男人共口近なり抱て鼻なゝていあゝい
こと脳中けゝ〳〵お遠徹て佐ゝ苦端〳〵ゝ俗世の
活計や爲〳〵ゝ鳥あゝと仏今い俗孫さまたゝて
世間のゝみといてあやうき不ゝ〳〵ゝ高野部ゝあの
業なゝ国をもめゝて世をゝ〳〵ゝ愛〳〵いつゝ心仏

記とゝあゝとハめつゝき一部もあゝ〳〵ゝのいかゝなゝ
書ハゝ分れ国地ゝ出ゝ国爲ゝゝゝ知ゝひて飢ゝ〳〵へ秋ハ山
家村里のすゝを〳〵て稲をもかり穂をもひろいよく
仏法を紹隆ゝんとゝりへハ孤ゝのゝ仏氣を換〳〵ていく貴方
ハ生禅僧ゝて学ゝ義をつゝるゝのゝ作〳〵ゝ仏部禅話
ゝ蹲蹲雪ゝ立同色ゝ〳〵ず明月蘆葉他ゝ似ゝ寄といひ
て我〳〵をゝゝのゝく禅とハゝゝゝて公会仏ゝ機孫あり
てハ寸作ゝ。爲あゝゝ仏わゝゝゝも宏智八句ゝ紫極宮中
鳥抱卵銀河波底光推輪とゝ誇あゝゝ仏まつハ方ゝ

るを法さへ以へなく分異仏を主宗生出田畑を選ひて
こそ生死をも沉淪ゆへ又山家村里乃栖いと祇乃氣ゆそ
心菊ハ茅ぢそり漁翁ハ釣をする農夫乃ふるまひ潙山和尚
の佛祖相助乃すゝ玉拙とも十成とも名をつくるハ若鈍
漢と成ぢれとも法華乃一理さゝく作ゝ生ゆへ座ハ法祝
破ゆゑ一きゝる爲世礼禪を見るを全今地獄乃業とのミ
笑ていよく依永浄去乃男すゝ元をとゝるを禄と極天
象の法心ざ一あつて法をゝんゝ又上がゆべき欲さまゝ未世とハ
ともさゝ公迷のゝこそあれく きまゝらまゝの人ゝ生ハ「見」の
類こゝ丹左俗の禄を戸ゆ服ゆゝまゝハ移地混雑ーさるとも
ちゝゝ或ハおゝふゝり或ハ於多諸て知識道人をもゆめそ
ーるおのゆへまや聖法をゝの未来記ゝ乱行の僧尼あつく
生法乃法則をゆゆ安智の男女あつく法の邪正を判ぜん
とあり今ハ時代まあひあゝれりいつまも肯てるなまハ口まゝ
する法つを似合釜のゝさありて不也まハゝゝそゝ公於て
鼻仇をゝ慢をまゝゝ元より安乃ゝなまハ一枚ゝ未附
の座をも寺焼法汁の一飯をも乃どこするハまーはて
結句ハ是非をいゝく依多社乃教ハ月をまを指とて是を

きゝひ祖師ゝ言句ハ門をたゝく瓦礫とて玉をもゝ
猶布を文字なりともいさゝうふ乃あゝ般若経法華
ハなをかゝゝれとゝの禅宗ハ地獄孫をやむすゝん又文のみ
ゝて伝系不立文字とて蒲団乃上ゝ偏執す是又法法
ゝ限なりすでゝ達摩ゝ安心傷ゝ辛上ゝを於解者氣力壮
なりとゝふ文字ゝ双て解者ゝ氣力よハ一とゝゝへさとりえ
てさゝ人文字ゝを入てハかゝゝて の孫ゝ体て解をする文字の
ゝを是非といひてハ云益ゝ或ハ書ゝの得法を是非ゝの
体ゝとゝゝあり一器の水を受て一器ゝうつをとゝ乃ゝ他

宗他ゝの語るあゝ安堵ゝく我宗ゝいひつゝへさゝ
ゝゝ地のゝゝゝくいゝつゝとゝるいひなをゝ小智ハ菩提のゝ法ゝ
と法ゝゝ是ひをゝゝゝ僧ハいるゝく乃乃人ハとあり
一時餐云乃荒禄僧名利法世乃空知識ゝ法をとゝ
たてハいゝゝ法乃理ゝ立へゝゝ人を見るゝ世をゝくゝゝ
ゝゝ法ゝ法計をゝ偏執誹謗おゝゝ孫ハ抜苦地獄のおゝれ
ゝ一ゝゝ者ゝを文字ゝを記ゝゝゝるあゝを一反ゝと
ゝゝゝ人の乃学者ゝるゝ力ハ偏ゝ鬼ゝ金杖棒をゝへ
在家乃禅ゝありゝ法ハ不法乃ゝゝゝゝとして不義

不善なり大なるハ大なる小ハ又小なるたくひ義をむく
豆君のあてゝる杖ゝハ弓矢のゝゝ去巧妙なる師ゝ禄法
数寄略ゝて合仏ちゝゝ当世ゝゝやはハ神明怨祀の
屋拵言状賢屋偏執の存たうたい経巻名字量度釜ちち
ひき結兵法伝授僧乃間とり法門ゝにゝゝ話仏言句れて
仏道と言ゝ嘲。句ゝこゝゝてハ鈍僅蹉過ゝ莫妄想信
麻ゝ也所棒話ゝゝてハゝゝゝゝ最初の一句乃剱及上
香厳撃竹樹下拑上倩女離魂祖師西来雲門屎橛千
窓槌五位君臣ゝ取懸り向上向下理智機関ゝ八識を

色ゝ大徹大悟ゝ到ゝゝゝを徹話仏もとゝんのこゝゝ禄も
ゝゝかくのゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大乗誹謗の罪をゝん
ゝゝあゝ所ゝ念仏者ゝゝゝ小乗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世を恐くも震のいましめをおそれて怪をはらひ南無
三宝〳〵仏祖をわすれず紙をするわが念仏ありがたと作
らきはひでゝ念仏をとなへゆへあるゝもゝぬきゝうり法門
をすゝうとてとれゆへ鶏猟殺博士ハうてきんつゝ稼家を
てつかまつること度をせを自己れ高量ゝりとゝしてこのゝ
ゝて家ほのあるゝひ丑れうへのたゝゝゝ由たゝゝ死中狂活の
を礼と見てゝり貴方ハ冊を似を稼をゝ稼へを法ハ仏
へんともなゝを道ゝいんげゝりとゝいへ爲あゝゝ仏洞を
かゝて仏をうゝ今ハ仏をゝかゝゝゝゝへゝゝ一丈伝教のゝゝひ

ゝゝゝひとゝゝいゝゝて一度あゝゝゝゝ

北のくりあるいとんや間浮不定の境まをいてちや是を業を
海ま之男の男ハ若を成くるとす云乱れ臨処業ま依て
是を云く人間万事見るもきくも愚ちり凡移蹤厨俳
無跨跡ちりと以へとも随一世上の体をあひ観ぞるまいつ是を
実なる自化乃不切を男へハとりまを又あやまれり或ハ
或ハ云ぐらて注分ゐまのんり何ぞ云が嗚呼まことなるん
めを名聞の記なるをもを海ーて人世のあやまりなのるを
ちめをのを

望月樹奈良県未文庫